

536-394



1200501500275

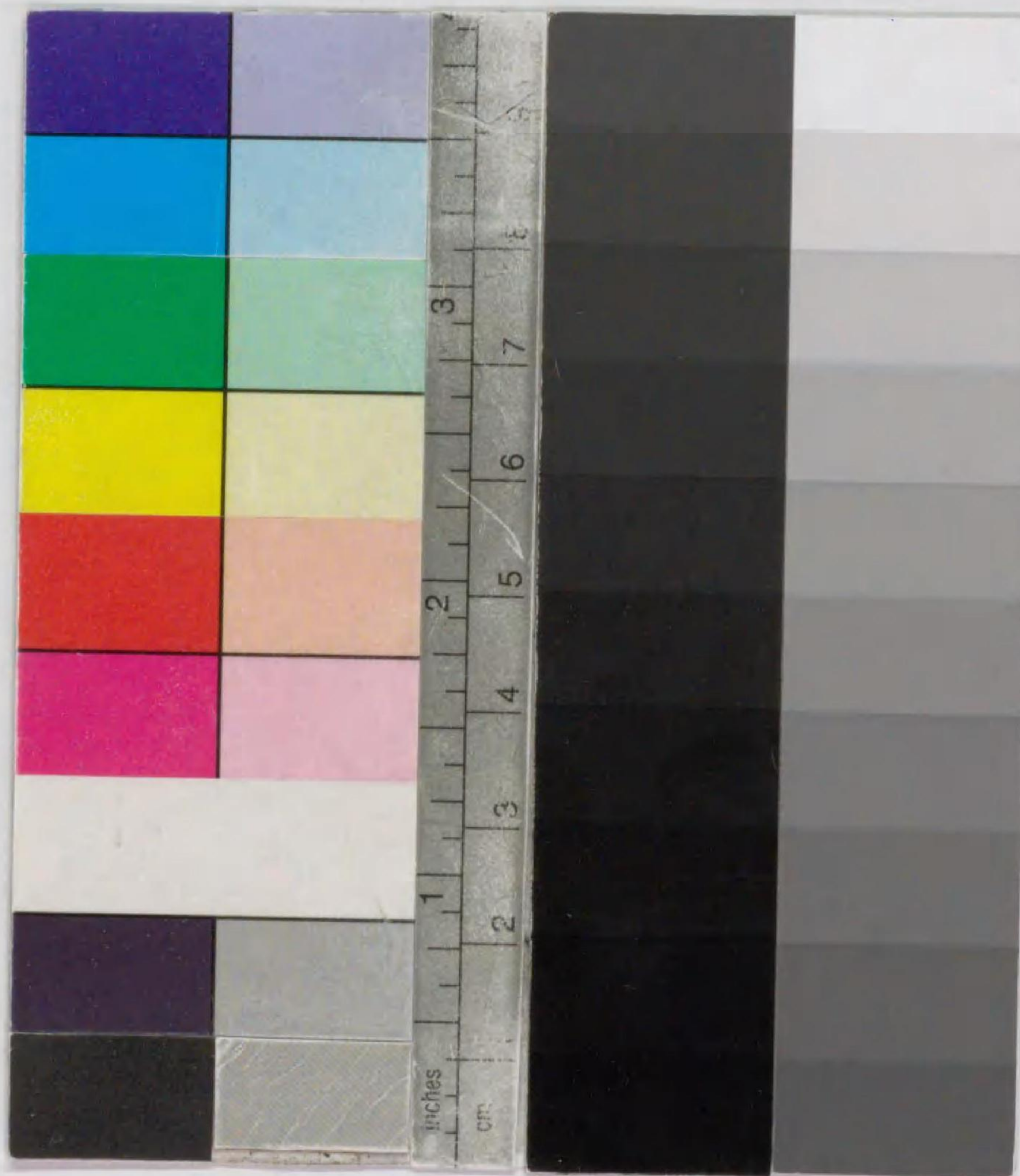
536

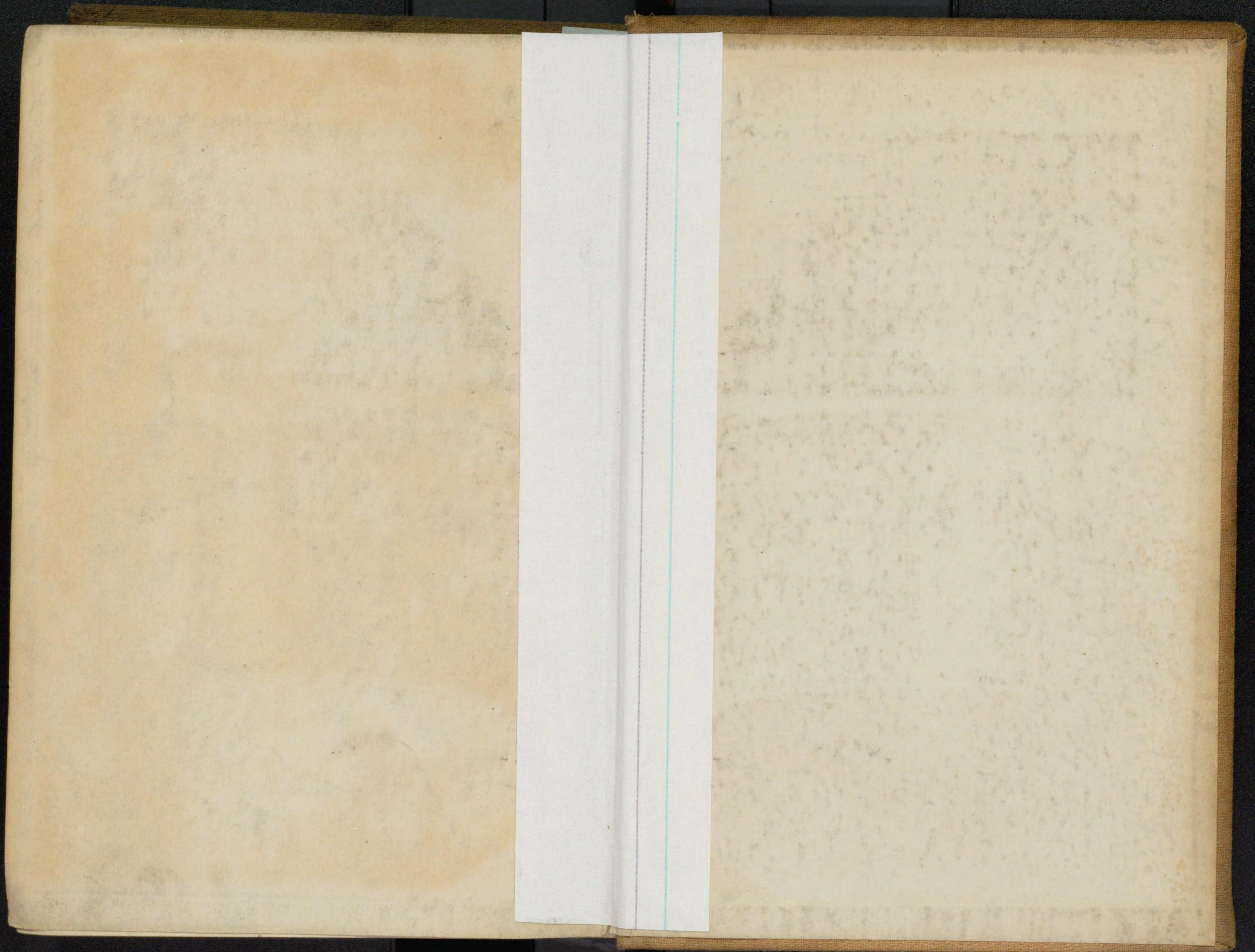
394

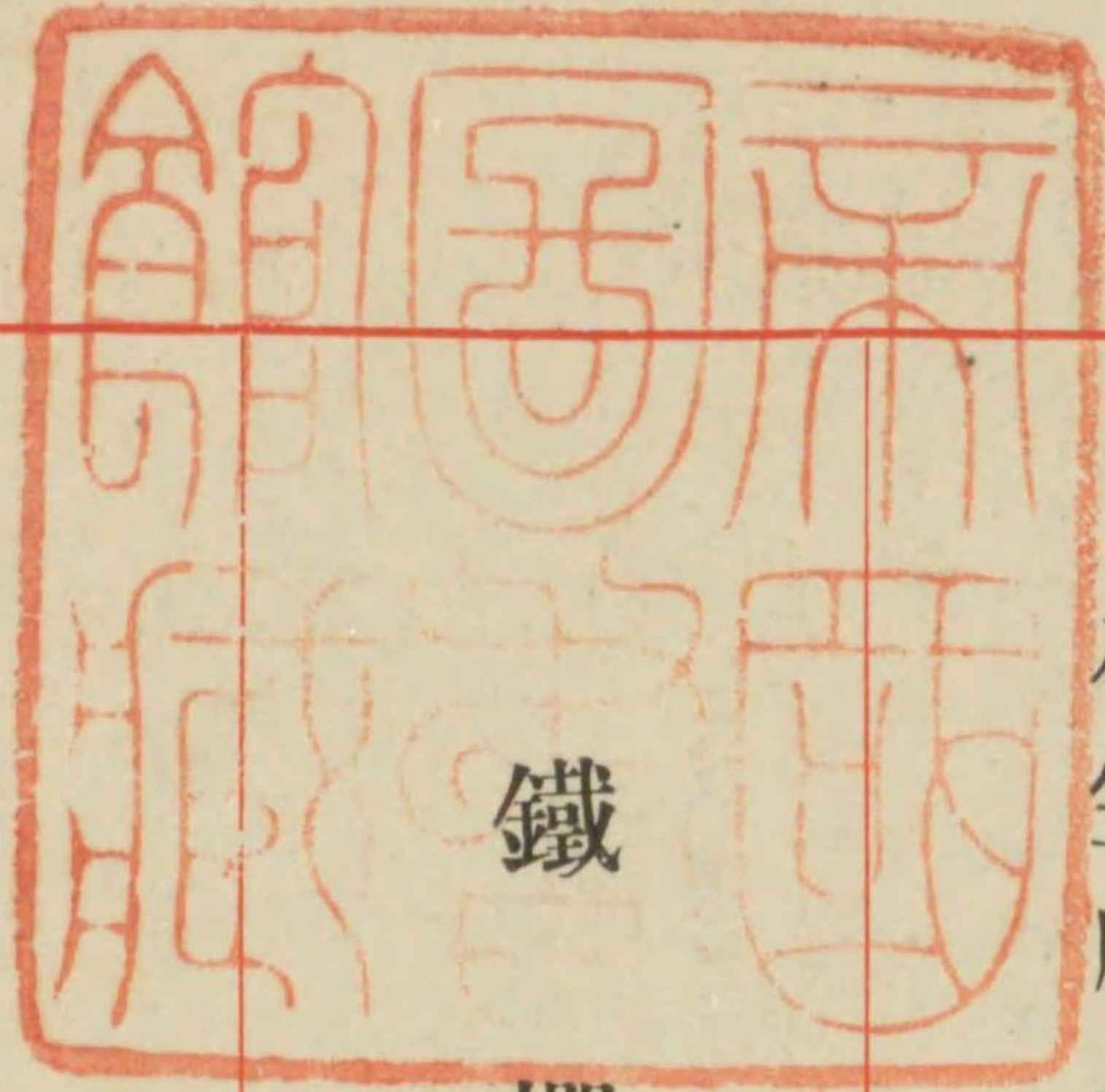
著生長原竺小
談漫櫻鐵

255

536
394







小笠原長生著

鐵
櫻
漫
談

早稻田大學出版部



536-394

はしがき

拙講『鐵櫻漫談』が東京日日新聞に掲載され始めると間もなく、畏友高田早苗博士から、之を早稻田大學出版部より單行本として出版したいとの交渉を受けた。私は欣んでそれに應諾し、新に數講を加へたのみならず、嘗て伊東海軍軍令部長の内意に由り編述せる『海軍史論』をも、附録として添へることにした。尤も兩方も辭句の推敲は充分と云へないが、終始感激に驅られつゝ筆を執つたものゆゑ、誠意に成れる文章は拙くとも人を動かすとの諺が眞實ならば、此の小冊子も或は



海軍小尉時代の著者

照小の者著の近最

はしがき

二

何かに影響する所があるかも知れない。然うなれば
本懐である。

昭和戊辰菊月

著者記す

目次

鐵櫻漫談

布哇政變前後	一
○ 佐久間艇長	三
水軍と海戦	四
兩雄意氣投合	六
勇將と名優	九
○ 觀音と忠僕	一一
二大俠と私	一四
雅	一五
○ 忘れぬ旅行	一六

鐵櫻漫談

目次

書道……………

一八〇

思出の三書翰……………

一九六

*

*

*

*

附錄

帝國海軍史論

自序……………

一

本文……………

一

布哇政變前後

世間ではよく、創立幾年だの、在職何年だのというて記念會をやるが、今年は私にも好記念があるよ。それはほかでもない、私が始めて東郷元帥の知遇を得てから、今年で丁度卅五年になるね、月日は流るゝ如しといふが、卅五年となると、人生から見れば短く、とはいはれない。従つてその間には、公私共に随分色々な事件があつて、冥想一番すると、まことに今昔の感に堪へないものがある。殊に元帥と私との初対面は、日本國內に於て、なく、三千四百里の波路を距てた布哇國の首府ホノルルで、しかも同國大政變の際であつたから妙ではないか。

布哇政變前後

それにつけて端なく憶ひ起さるゝはその政變で、カメハメハ王朝の滅亡は、これ亦一篇の哀詩であるから、その顛末の大意を話して見よう。

◇
一體ハワイ國といふのは、北太平洋の中央にあつて住人の居る八個の島と、數個の無人島とから成立つてゐるので、その面積を合せると、略わが四國に匹敵し、土著の住民はポリネシア人種である。この群島は、西曆千七百七十八年（わが安永七年で昭和三年より百五十年前）、英國の有名な航海者キャプテン・クックによつて發見せられたのであるが、夫よりも五百年程以前に、群島の一なる馬哇島に一外船が漂着した事がある。その乗組人の皮膚は島民のやうに黒くなかつた。さうして島内に留まつて土人の女と結婚し、その子孫が段々繁殖して一種族を成したが、その祖先の漂流者といふのは日本人であつたとの説がある。勿論歴然たる證據がある譯ではないが、潮流の關係より推察し、又實際に徴すると明

治以前に於てわが船舶の同群島に漂著した事十數回にも及んでゐるから、右の傳説も一概に無稽の言として排斥すべきものではあるまいと思ふ。

◇
さて同國王朝の歴史を述べると、昔時は八島におのゝ勢力家が居て、互に抗争して相下らなかつたのである。所が十九世紀の初めカメハメハといふ英傑が八島中の布哇島から起つて猛威を振ひ、段々に七島を征服して、西曆千八百十年（我が文化七年）遂に群島を統一して王位に即き、さうしてオアフ島のホノルルを首府と奠めた。それより王統連綿として、第七世カラカワ王に至つたが、その名にも似ず太平洋のあだ波は、年々に荒びを加へて騒がしくなるので、聰明な彼れは世界の趨勢に鑑み、深く慮かる所あつて明治十四年の三月わが國に來遊せられた。皇室では、濱離宮内の延遠館を御宿と定められ、當時未だ十五歳であらせられた山階宮定磨王（後の元帥海軍大將東伏見宮依仁親王）が、しばし

ば御訪問遊ばされて、御話相手とならせられた。するとカラカワ王は、宮の端殿なる御姿と英明な御性とに心服して、此上なく愛で参らせたあまり、更に一の願望を添へたといふことである。



一刻千金と銘打たれた春の夜の月影を浴びて、馬車一臺、延邊館を出て、新橋より溜池の畔を過ぎて紀の國坂を登り、假皇居の正門内へと姿を消した。こはこれカラカワ王が、故意に夜陰を選んだ不時の参内であつたが、大帝におかせられては快くこれを御引見遊ばされ、その希望により、侍臣をも遠ざけられて御内談あらせられたと漏れ承はる。九重雲深うして固よりその御内容を拜聞すべきでないが、遙に後に至りホノルルに於て取沙汰された所に據ると、當時カラカワ王は三つの切望を抱持してゐたとの事である。即ちその一は、日本天皇を盟主に仰いで東洋諸邦の同盟を策する事。

その二は、敬愛する日本の一皇族を王姪（カラカワ王には子女が無かつた）の配として迎へ、之に王位を継承せしめたき事。

その三は、日本より多数の移民を送られたき事。

是れと同時に又こんなことも傳へられてゐる。カラカワ王は歸國後腹心の臣に向ひ、わが大帝の廣大無邊の聖徳を讃へ、人間の神様と嘆美して、親しく贈られた御眞影を神聖の場所に安置してゐたといふ。そは兎に角、わが國威がまだ夫ほどまでに揚がらなかつた明治十四年の頃に、夙くも大帝を盟主に仰がうとした彼れの明鑑には、何としても敬服せざるを得ない。

斯様に英邁であつたカラカワ王は、それから十年後（明治廿四年）の一月廿一日、米國桑港の客舎で歿せられた。在位十七年享年五十五、まだ〳〵春秋に富んでをられたのに、洵に惜しい事をした。仍て王妹リ、オカラニ内親王が位を嗣いで、第八世の國王とな

られたが、間もなく内外數多の紛擾が起つて來た。所へもつて來て、折悪くも、政治や外交の經驗に乏しい女王は、四圍の事情を充分究めないで、即位の翌年、從來の憲法に大改正を加へようとした。すると參政權を有つてゐる歐米の移住者達が、之に反對して猛烈な運動を開始し、それが段々悪化して、遂に大事件を捲起すに至つた。尤もこれは裏面に入組んだ事情もあつたし、色々な魔の手も働いてゐたであらう。

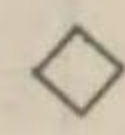


先づ第一に市民大會が催され——その殆ど全部が外國人である——さうしてその結果保安會といふものが設立せられ、善後策とか講ぜられて、斷然從來の王政を廢し、假共和政府を建設することを決議した。この通知に接した女王は、痛恨骨に徹し、祖先の畫像の前に一族重臣を集めて議を凝らした。が、よき分別も出ず、徒らに喧騒する者が多かつた中に、二三氣慨の士あつて憤然蹶起し、民間の同志と結んで王黨を組織し、多少の抵抗を

試みたが、何分にも兵力が無いので、米國軍艦ボストン號の陸戰隊百六十名のために、一溜りもなく壓迫せられ、忽ち散亂して仕舞つた。そこで女王も詮方なく

『米國全權公使ジョル・エル・スチーブン氏は、米國の水兵をホノルルに上陸せしめ、且これによりて假政府を保護すべしと宣言せるが、予はこの兵力に對抗する能はざるの故を以てこゝに服従す』

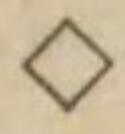
この慙むべき布告文を最後として、八十三年續いて來たカメハメハ王家は滅亡し、キング街にある王宮は、假政府の手に占領せられ、廢王リ、オカラニは近親と共に直に街はづれのさ、やかな民家に移つた。これは西曆千八百九十三年（明治廿六年）一月十七日の出來事である。



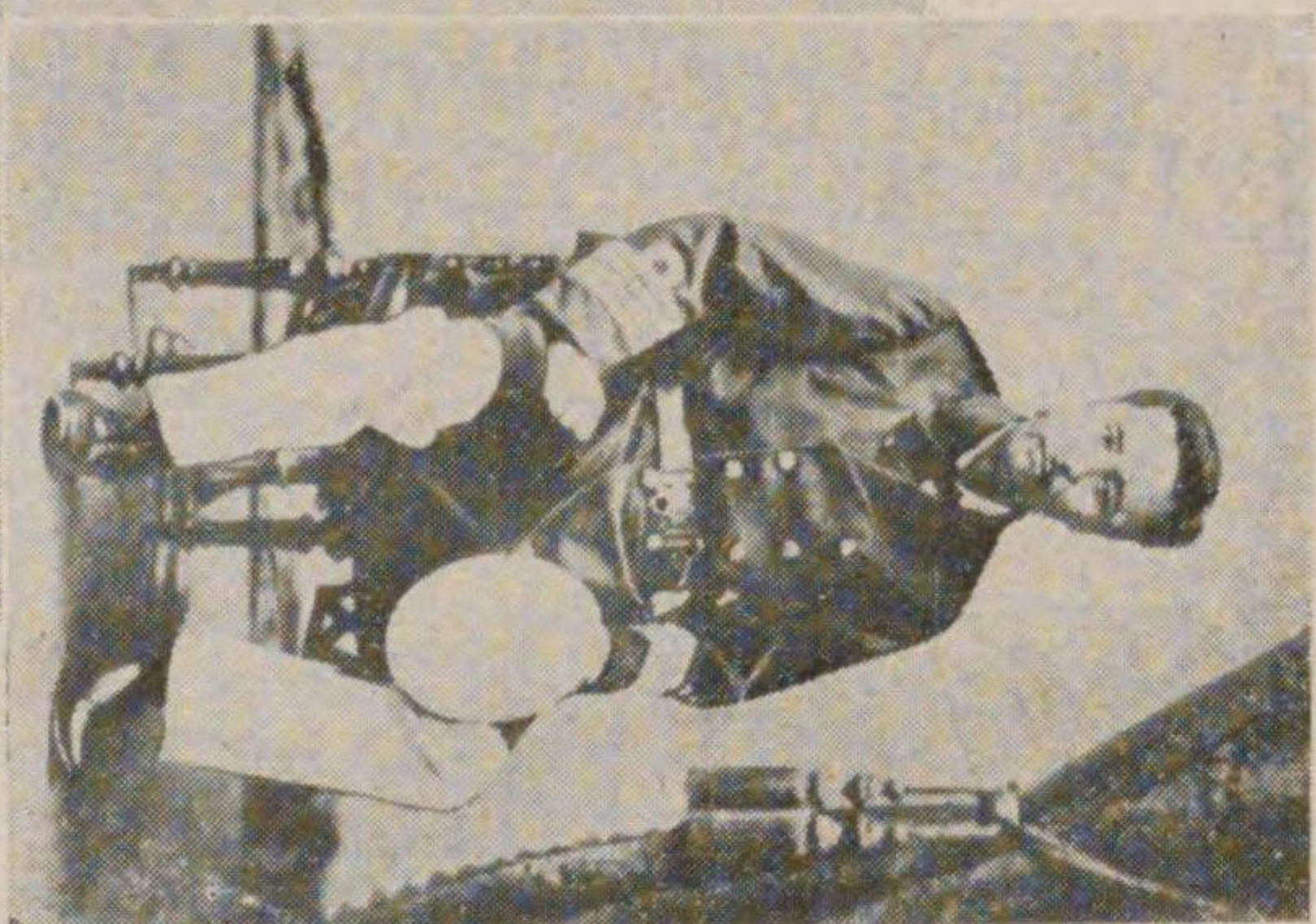
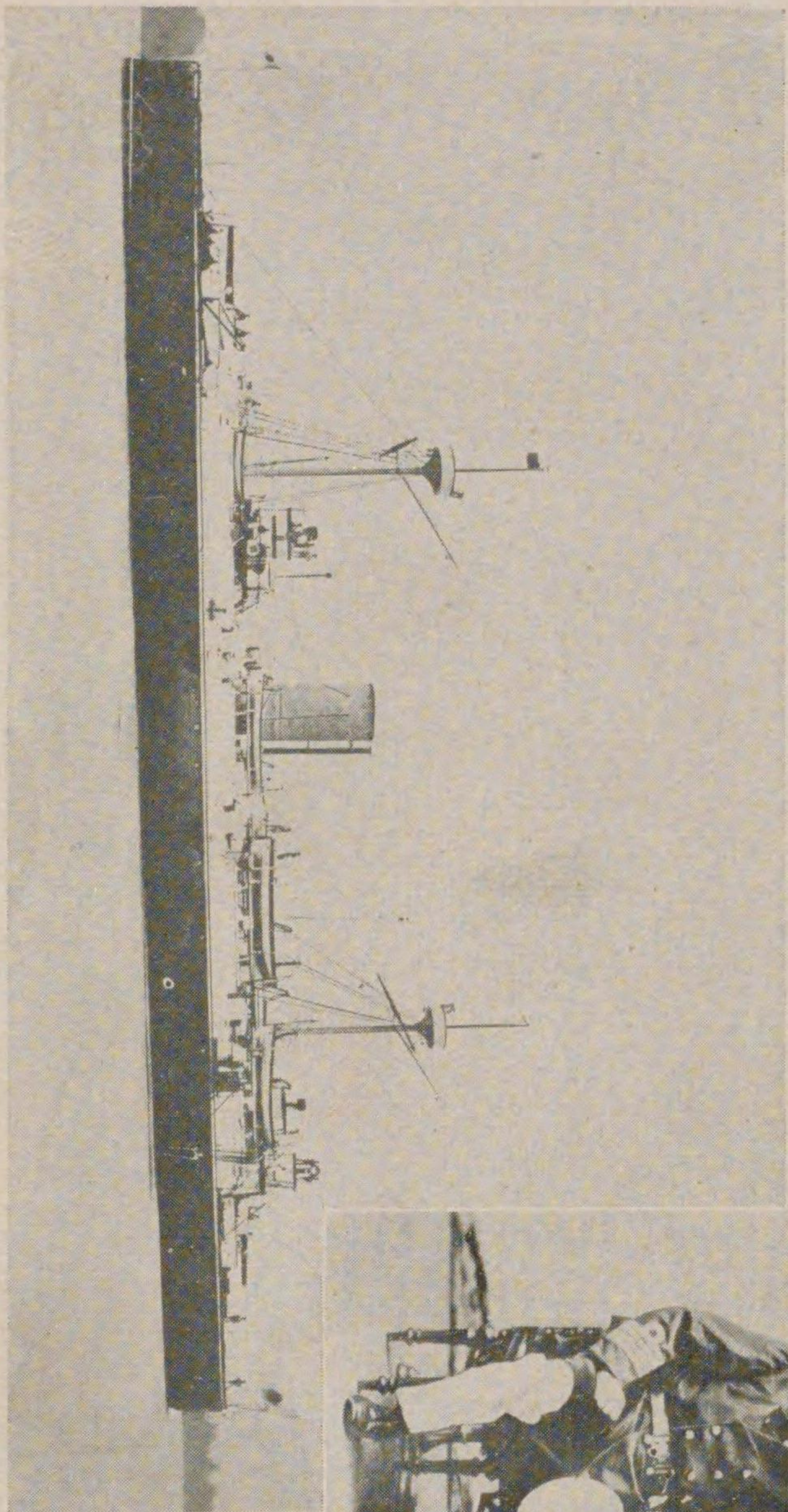
續いて米人のドールといふ市民が假政府の大統領に選まれ、米國の保護を受けるといふ

理由の許に、二月一日から、舊王宮たりし政廳の屋上には米國國旗を掲げ、同廳及び米國公使館、同領事館は、何れも米國兵によつて護衛せらるゝといふ始末になつた。

當時同國には二萬五千といふ多數のわが居留民がゐるので、その保護のため、軍艦浪速は二月二十三日、燦たる旭日旗を潮風に翻してホノルルに入港した。何といふ緊張した場面であらう。遙に見ゆる政廳には、屋上高く米國旗揚がり、陸岸のなたには、同國水陸兵が碧眼を光らして三々五々徘徊してゐるではないか。更に港内には、同國艦隊司令長官スカーレット少將が、ボストン、モヒカン、アリアンスの三艦を率ゐて堂々と碇泊して居るし、その附近には、一月廿八日桑港より入港したわが練習艦金剛及び英國軍艦カーネット號が控へてゐた。



浪速の艦長は海軍大佐東郷平八郎、即ちいふまでもなく今の元帥その人であつた。彼れ



帥元郷東の代時長々艦同と速浪艦軍

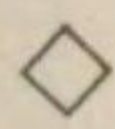
は當時年齒止に四十八歳、性來の鋭鋒を莊重の修養に包んで、將に將たるの偉器すでに大成を告げんとしてゐる。さうしてその部下の中には、嘗てカラカワ王をして敬愛措く能はざらしめた、山階若宮が、今は小松若宮依仁親王となられて乗艦しをられたとは、よくよく奇しき御因縁ではないか。

浪速の總乗員は令によつて艦橋下に集合した。橋上には東郷艦長が端然として立ち、底力ある聲で徐に口を開いた。

『一同へ一言する。改めて申さずとも、諸氏に於てはすでに十分の覺悟があると思ふが、本艦が當地に碇泊してをるのは、皇國領土の一部がこゝへ延長したと意義を同じくするものがあることを忘れてはならない。この觀念よりして、我々の責任は一層重大となるのである。従つて今後變亂等の有無に拘らず、我々の一舉一動は直ちに御國の品性にまで影響を及ぼすものであることを覺悟し、輕舉妄動を慎むと同時に、いよ

いよ決行の場合には、少しも躊躇することなく、斷乎として進むべきに進み、以て皇國武人の本領を充分發揮せねばならない』

是が著港後直ちに爲した訓示であつた。さうして先著してをつた田代金剛艦長や、藤井總領事等より、政變の經過並に現下の形勢を聴き、小松宮をはじめ諸士官を艦長室に集めて、事變が起つた際取るべき方針、領事館並に居留民保護に關する配置、準備等を決定したので、一同はその敏活さに驚いたさうだ。



それから二日経つと、藤井總領事から、『我移住民のゐる諸島へ軍艦を一巡させ、且事情視察のため秋月外務省參事官(浪速に便乗して來たのである)をその軍艦で出張されたい』との照會があつた。

仍て東郷浪速艦長は、獨斷で金剛を巡航させる事に決定し、その旨を田代金剛艦長に傳

へ(同艦は三月一日出發諸港へ寄港の上同月八日ホノルルへ歸著した)同時に仁禮海軍大臣に斯う電報してゐる。

『二月二十三日著艦、今靜謐、總領事請求により金剛布哇島へ回航せしむ』

ハワイ島といふのは群島中一番多くわが移住民がゐる島である。所でこの時分ホノルルには電線が通つてゐなかつたので、書面を定期の汽船に託して桑港から発信させねばならないのだ。で、この電報も、海軍省の原書には、三月九日桑港發電東郷、となつてゐるから面白いではないか。



爾後續々展開し來る東郷艦長の活躍振は、正しくハワイ王國滅亡史を飾る一異彩である。彼れは細心の注意を以て政變の成行を觀、三月十六日伊藤海軍次官に長文の手紙を出してゐるが、その中に觀察した所を斯う述べてをる。

『現今ホノルル府及び土民に不穩の舉動無之候。豫て米國政府へ布哇國連合請願の爲派遣せられたる四名の内二名は、去る十日歸國せり。米政府に於て布哇連合の請願于今整はざる模様相分り、王黨少しく勢力を張るの狀あり。近頃に至り、王黨政社を立て復政の意あり。此の後の結果少しく混雜と被思候得共兵器を動かす程の事は有之間敷と被存候。王黨より米國へ派遣の者は于今歸國せず、當政廳の保護は依然米國兵員を以て固め、政廳に米國布哇兩旗を掲揚す。現今の形勢は全布哇國人民の投票に依り王政に復するか米國に連合するかを定むべしとは、米國人以外の外國人の衆論なり(中略)。近日中に米國政府より布哇連合請願の件に付委員を派遣すべく、當政府の結著は米國政府の意によること、被察候(下略)』

この書面にも有る通り、王政が近來多少活氣を帯びてきたが、それかあらぬか、十七日の午後、王黨の首領株て舊内閣員であつた四人の者が、突然浪速を訪問して東郷艦長に面會を求めた。仍て艦長は快くこれを艦長室に通して面會し、一時間程懇談を遂げた。その内容について、艦長は副長にさへ一言も話されなかつたが、右會談中、當直將校が急用あつて報告に艦長室に行つた際、『軍人には軍人の本分があるので』との艦長の英語が聞えたというてゐる。



浪速當直日誌の三月十六日の分にかういふ事が記してある。

『午前軍艦旗掲揚後艦尾のジャコブスラダーより一名の邦人昇り來れり。この者は○田○作といひ、殺人犯としてオアフ牢舎に繋がれ、處刑中脱監し來れるなり。よつて艦長は總領事館に通報し艦内の禁錮に繋ぐこと、せり』(談者曰拙著『東郷元帥詳傳』で舷門に泳ぎついたしたのは艦尾の誤りであつた)。

同じく四月二十日の記事に

布哇政變前後

『本艦禁錮に留め置きたる犯人を總領事館に引渡す』

とある。即ち一ヶ月と五日間犯人を艦内に留め置いたので、之が大問題を惹き起すことになつた。

丁度三月十六日は朝七時頃に激しい驟雨が襲來し、暫くは濛々として數間先きも見えない程であつたが、約一時間てからりと霽れた。それから間もなく、海岸通りが物騒がしくなり、人々が右往左往する中を、多數の警官が驅けまはつてゐたその途端、年齒若い一人の日本人が著衣のまゝ、ざんぶと海に飛び込み、抜き手を切つて浪速の艦尾に泳ぎつき、索梯子を傳はつて甲板に上つて來たので、そこにゐた番兵が直ぐに引捕へ、當直將校に報告した。そこで衛兵司令が取調べて見ると、喧嘩の上で誤つて相手を殺し、ハワイ政府の獄に投られたが、隙を見て脱獄し、捕吏の追蹶を遁れて來たといふ事である。衛兵司令からこの顛末を聞き取つた艦長は、新聞から目を離し、靜かに一言

『よしよしそのまゝ、禁錮に容れて置け』

といつたぎりて、新聞を読み續けてゐた。

程なく二艘の端舟は、波を切つて浪速の舷門に著くが早い、數名の警官は、追取刀といふ意氣込でどやどやと乗込んで來た。

◇

『貴艦に罪人が泳ぎついたので、確に見届けて參つた、お引渡し下さい』

いやに氣取つて芝居がかりの談判を始めた、尤もブロークンな英語でね、

『さうですか、暫時お待ちなさい』

當直將校も劣けずに臺詞めいた答へをして、これを艦長に報告した。

『さうか、此處へ通せ、俺が會ふ』

艦長は丁寧な警官等を迎へて、さていうた。

『お氣の毒だがお渡しすることは出来ぬ。お交渉の筋があるなら總領事へなさい』
斷乎と勿付けた上で、紅茶など勧めた。これが本當の茶にしてゐるとも云ふのであらうか、その謎が彼等に解らないので持つたものさ。兎に角彼等は煙に巻かれて引揚げて行つた。すると翌日は上役が來た。翌々日はまた其の上役が來た。警視總監だ、警保局長だと、手を換へ品を換へて嚴談に及んだが、浪速艦長が頑として應じないもので、つひに彼等は業を煮やし、不穩の風説が色々と傳へられた。

或る歐字新聞は激越の語調で、

『有鑒に忍耐強き假政府員も、浪速艦長のあまりに頑冥なるに愛想をつかし、遂に一大決心の許に米國艦隊の力をかり、兵力に訴へて罪人を取戻すとの事である。かかる非常手段の實現は甚だ好ましからざる事であるが、或は止むを得ぬかも知れぬ。さうして其責任は一に浪速艦長が負はねばならぬ』

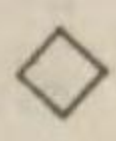
との半論説の記事を掲げ、又他の一紙は

『既に兵力に依つて取戻した』

と報道するかと思へば、更に別の小新聞中、

『米國艦隊に拮抗するため、日本總領事は、本國政府へ軍艦數隻の増派を請求せりと云ふ』

と、大與太を飛ばすものさへ出て來た。



浪速の艦長室に在つて、是等の新聞紙に目を通した艦長は、全然關知しないやうで、毛一本の搖ぎをも見せなかつたが、本國への誤傳を氣遣つたので、報告中にその虚報なる旨をかう記してゐる。

『(前略) 追々當地新聞紙上に軍艦浪速へ留置中の日本犯罪者受取の爲米國艦隊司令官

スカレット氏の命を以て兵員を向け兵力にて犯罪人を取戻せし云々、又は日本政府へ總領事より軍艦數隻派遣の事を請求したる等、其他本艦に關する事新聞紙上に續々掲載有之候得共、全く無根の虚言に有之候。風説甚敷事件は説明致候事も有之候間、御参考の爲め申上候(下略)。

追て當地新聞紙一綴御送致候

如何に威嚇しても、何等の效も無いことを覺つた假政府の當路者は、遽に態度を一變して拜み倒しの策に出で、副統領デーモンといふ人が、親しく浪速を訪問して艦長に面會を求め、辭を卑うして

『不穩の言辭を弄した新聞の記事は、假政府の全く與り知らぬ所であるゆゑ、吳々も誤解の無いやうお願ひする。あの如き記事を出されては、假政府も痛くない腹を探らる、やうで、迷惑至極であるから、爾來充分注意するやう、新聞社には誠筋を加へ置

いたゆゑ、これをも御諒承願ひたい』

と、先づ慇懃に挨拶して置いて、これも畢竟罪人が貴艦に居るから誤解が起つたので、就いては何とかして罪人をお引渡し下さる譯には參るまいか、と眞綿に針を包んだ言廻して攻め寄つた。東郷艦長も、これに對して、丁寧な待遇をなし、

『御念の入つた儀で痛み入る。併しそれはそれとして、罪人をお引渡しすることはお斷りする』

彼れ一流の箇單さて、明瞭と謝絶し、三月二十五日の曉天、錨を抜いて港外に出で、標的を投げ込んで、艦砲射撃をズドン〜。



艦長の強情には、總領事も餘程でござつたと見え、後われ〜が行つてからも、折りに觸れては、

『浪速艦長には酷い目にあつたよ』

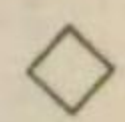
と愚痴つてゐた。

どうにもかうにも浪速艦長が楨杵でも動かないので、假政府との間に板挟となつた總領事は、假政府よりの公文書に對して返答せねばならないので、それに浪速艦長の願末書を英文で添へようと、その旨を頼んで來た。艦長は願末書を添へることに異存が無かつたが、

『日本文で澤山ぢや』

と、堂々として言はんと欲する所を、遠慮會釋も無く邦言で書き立て、總領事に宛てた手紙には、

『英文になさる必要あらば、貴方に於て御隨意に譯されたく、東郷の與る所に御座無候』



數日の後本邦からの郵便物が届いた。東郷艦長宛の分を順々に披見して行つた艦長の面は、平素の沈着にも似ず、遽に緊張して來た。と云ふのは、一封の内訓が到着してさしも頑強な彼れも、今は犯人を退艦せしめざるを得ない場合と成つたからである。彼は直ちに總領事館員を招いて容を正し、

『東郷は軍人の本分として、今は内訓に服従するの外はない。如何にして斯う云ふことになつたかも察せられぬでは無いが、なつた以上は止むを得ない。併し彼の犯人もわれ〜と同じく日本臣民の一人ぢや。それが救助を求めて來たのに、おめおめと假政府などと得體も判らぬものに引渡すは心外の至りぢや。』

東郷はたとひ内命であつても彼れを假政府の奴どもには渡されぬ。貴下方にお渡しするから、東郷の眼の届かない場所、貴下方の御希望通りなさい。これだけは確と申

し上げて置く』

館員等は、またもや御意の變らぬうち、早々に犯人を受取つて退艦し、一ヶ月餘に互つた事件も、どうやらかうやら落着した。

この犯人の○田といふのは、當時青年であつたから、もし天壽を完うし得られてゐるなら、まだ何處かに存在してをる筈だ。この話が出る毎に東郷元帥も、彼れが生きてゐたら妙ぢやらうよ、と當時を追懐して感慨無量の體である。果して永らへてゐることやら。



有名な禮砲事件といふのが起つたのも此の前後である。それは大要は拙著『東郷元帥詳傳』に記載したから、御承知の方もあらうが、一口にいふと、假政府の大統領に對し、禮砲を放つかどうかの問題で、金剛一隻であつた時分から未定として取扱はれて來た。されば同艦長は總領事と協議の結果、わが訪問に對する大統領の答禮は、總領事館で受けるこ

とにし、それで禮砲發砲を避けるといふ消極的方針を取つてゐた。ところへ浪速が入港したので、田代金剛艦長は早速同艦を訪問し、先任の東郷艦長に、禮砲に關し從來自分が取つた態度を話して意見を訊ねた。すると東郷艦長は、大いにその用意周到であつたことを賞讃した。が、何事にも果斷と徹底とを信賴としてゐる彼れは、餘事に託して避けるのを屑しとせず、

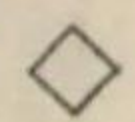
『假政府と自稱するやうな曖昧なもの、大統領とかに對して、禮砲を放つなぞとは以ての外だ。少しも懸念するに及ばぬ、斷乎として謝絶するがよい』

と、否定を強調し、その意を金剛艦長にも含めた。

折も折、エス・ビー・ドール大統領は、米國旗艦ボストン號にスカーレット司令長官を訪問することになり、その旨浪速にも通知があつた。

小なりと雖も、假なりと雖も、苟且にも一國の大統領となつたドールの得意は想像に餘

りある。彼れは六尺豊かの體軀を新調のフロックコートに包んで、シルクハットを戴き、握り太の杖を突いて悠然馬車より下り立ち、波止場を棧橋へと潤歩した。彼れの口邊よりはバツ／＼と紫の煙が散り、得ならぬシガアの薫りが四邊に漂うた。やがて彼れは棧橋に著いてゐる美麗な汽艇に乘移り、ハワイ國旗を艇尾に翻して、意氣揚々とボストン號へ向つた。さうして同艦に著くとひとしく、嚙喰たる樂の音が起り、同時に米艦三隻より打ち出した二十一發の禮砲は、殷々として四邊に轟き、港内、一時は砲煙に鎖される盛觀を呈した。之に反して、わが浪速は、常にも増して艦内静まりかへり、たゞ眼光炯々たる艦長が、双眼鏡を手にして冷然艦橋に立ち、その附近を往復するドールの乗艇を見下してゐたとある。



禮砲謝絶の件は、この際のみには止まらないうで、浪速が再度回航——同艦は五月中旬一旦

本邦に歸り、十二月二日再度ホノルルに入港したのである——以後、偶々明治二十七年一月十七日、假政府建設一周年の祝典を擧ぐるため、その外務大臣より在港の各國軍艦に向ひ、

『滿艦飾を施したる上、正午には禮砲を放ちて祝意を表されたし』

と、依頼した時も、東郷浪速艦長は、『お断りする』と魚膠もなく刎ねつけ、遂にホノルル碇泊中浪速の砲口は、たゞの一度も假政府に向つて儀典の煙を吐かなかつたのである。

併しこのドールといふ人物は、餘り何かに拘泥しない洒脫の性質であつたと見え、東郷元帥との間に床しい逸話を遺してゐる。それは遙に後の話であるが、序にこゝで述べさせてもらはう。

時は明治四十四年七月某日、御名代として渡英せられたる依仁親王に従ひ奉り、六月廿二日滞ほりなく英皇戴冠式の參列を終へたる東郷大將は、偶々寸暇を得たので、英國博

物館の見物に出向いた。而して今正に館内に入らうとする途端、内から出て来た長身の白人老紳士があつたが、大將と見ると、懐かしげにつか／＼と進み近づいて、

『御機嫌は如何ですか、私はお目にかつて大變嬉しう御座います』

と懇懇に挨拶して、右手を差延べ握手を求めた。すると大將は、どうも見覚えがないので、瞬時躊躇つてゐると、同行してゐた谷口中佐（現大將）が却て知つてをつて、彼れは以前ハワイ假政府の大統領をしてゐたドール氏であると、大將に私語いたので、大將も成る程と打ち領き、その奇遇を微笑みに示して、堅い握手を交したさうだ。

◇

指を屈すれば十八年、一方は一艦長他は大統領で、禮砲や犯人の事を争つて相下らなかつた兩人が、今や片方は英名世界に赫赫たる大將となり、他は私立會社員たる老紳士となつて、以前にかつて見られなかつた誠意籠る握手をしたてはないか。加之この際もまた

依仁親王に御關係が有つたとは、天公何處まで巧を弄するののか。

夫から間もなく、ドールは社用を了つて歸布した。その後我某紳士から、東郷元帥の書を貰ひ、唯一の家寶として大切に保存してゐたさうだが、昨年眠るが如く逝いたと、友人の山崎直方博士からわざ／＼知らせて來て呉れた。

◇

話は明治二十七年春のホノルルに戻る。われ／＼の乗艦高千穂が浪速の交代として同港に著いたのは、三月二十一日であつた。その日の夕方、私は當地の状況を訊き旁々、久々で眞水風呂の御馳走にならうと、同僚三四人と共に上陸して總領事館を訪うた。而うしてその新聞閱覽室で、はからずも東郷浪速艦長に會うた。そこで一同本日本入港の挨拶を述べ敬意を表すると、艦長はいと靜かにうなづかれ

『御苦勞じやつた。皆元氣のやうじやな』

と慇懃に禮を返された。これが私が元帥の聲に接した最初であつて、一同はそのあまりにものやさしいのに、意外の感を抱かせられた。

といふのは、今日入港後訪問して来た總領事館員等が、話頭浪速艦長の事に及ぶと、語氣も何となく恐怖を帯んでゐる程で、定めし寄りつけもしない權幕の人だらうと想像してゐたからである。然るに會うて見るとあべこべで、丁度小父とても話をしてゐるやうな親しみを覺えるので、いづれも乘氣になつて、無遠慮に色々質問を發して教へを乞ふ。それに對して艦長は、諄々として説き示された中に、私の最も深い印象となつたのは――。

『われ／＼は何時も軍艦旗を見詰めてをればよい』との一語であつた。こは、軍人は終始餘念なく、たゞその本分を盡すことのみ精神を注げ、との訓戒となづかれるので、まことに脊々服膺すべき金言である。ましてや教ふるその人は、明治二年はじめて見習士官となつてより、元帥大將たる昭和三年の今年まで六十九年の間、『何時も軍艦旗を見詰めて』

一意専念御奉公を勵み、以て純の純たる軍人の模範を示してをらるゝては無いか。これを見、かれを思ふ時、あり／＼と言行一致の活教訓に觸れて、自ら感銘せざるを得なかつたが、不肖な私は遂にこれを徹底し能はなかつた。誠にはづかしい次第である。

◇
ついで浪速は警備の任務をわが高千穂に引継ぎをはつたので、三月廿九日ホノルルを抜錨して本邦に向つた。而うして『英雄艦長』の名を、今もなほその巻説に留めてゐる。ここに於て舞臺は一轉し、高千穂艦長野村貞大佐の登場となり、『英雄』は『勇猛』と變つて、再度大向をうならせたのである。

◇
あだ守る砦の篝小夜ふけて

夏も身にしむ越の山風

布哇政變前後

含雪將軍が、一首の國風に、夜の對陣を詠じたる、戊辰の長岡戰爭は、馬上劍を擧げて藩軍を指揮せる河井繼之助が、水際立つた駈け引に、存外手痛き戦況となつた中にも、繼之助の從弟にて野砲半隊長に擧げられた野村といへる青年は、榎峠の嶮を扼して官軍に一泡吹かせ、更に今町等に轉戦して驍名を馳せたが、銃弾に右脚を貫かれ、無念と叫びつ後送された、と來ると、宛然元龜天正の軍記を繙く感がする。これが即ち今の高千穂艦長で、その風采といひ、氣質といひ、何所までも東洋式豪傑の典型である。従つて若し彼れをして西隣にでも生れしめたなら、張作霖の向うを張つて、東三省を掌握する位は易々たるものであらう。されば土佐沖の三角波を一睨して『死方用意』の號令を下したり、某國砲臺砲の鑄てるのを見て案内者に、『この彈丸は木製か』と擲擧したりするのは、彼れが得意の獨壇場で、斯かる際には禪氣逆つて機鋒當るべからざるものがある。



斯ういふ艦長が現れたのだから、事情が面白くなつてくるね。野村艦長は、ホノルル到着當初は、『面倒くさい』というて、成るべく外人との交際を避けてゐたが、何か感ずる所があつたと見え、急に態度を一變して、ドシ／＼交際をはじめ、交際費で足らず、俸給で足らず、多大の借金までして發展した。さうして五月二十二日には、艦内に四百餘人の紳士淑女を招待して大舞踏會を催した。併し艦長の接待振りは、聊かも歐米の儀禮に頓着せず、日本流七分に我流三分を加味したもので押し通したが、反つて好評を博したから不思議ではないか。ついで六月十一日となつた。この日はハワイ王朝の創業者たるカメハメハ王の誕生日に當り、現在のハワイに取りては、一入思出多いものなのである。この朝高千穂では、きのふ入港した練習艦金剛とも打ち合せて、軍艦旗を擧げると同時に、兩艦一齊に滿艦飾を施した。艦首より檣を傳うて艦尾へと引渡された數百の彩旗は、潮風に翩翩として美觀を呈し、何となく假政府に對して一種皮肉の感があつた。加之高千穂の艦橋に

ては、野村艦長が腕を組んで濁歩しつゝ、時々満艦飾を仰いで獨り悦に入つてゐた。



夕刻になると、艦長が士官一同を艦長室に呼んだ。何事かと往つて見ると、艦長甚く御機嫌の體で、

『噂によると今夜舊王宮前の廣場で、王黨の連中が演說會を催して假政府の攻撃をやり、時宜によると或は爆發するかも知れんといふことぢや。その善悪は別問題として、如何に腑甲斐ない王黨でも、これ位の事は行りたからう。就いては年齢の若い貴君方は、なるべくさういふところを見て置くがよろしいから、當直と陸戦隊と野砲隊とに差支無いものは、往くやうになさい。縦令危険な場所に立入るとしても、艦長は強ひてお止め致しません』

何と奇抜な訓示ではないか。すると、士官の中から好敵手が現れた。それは二番分隊長

の八代大尉（今の大将男爵）である。

『危険の場所に立入る位な事は、艦長のお指揮を待つまでもありません。それよりも若し何か騒動でも起つたならば、艦長の御趣旨を體して、必ず躍進してお目に掛けますから御安心下さい』

聽いてゐた艦長は、思はず會心の笑みを漏らして、

『元氣ぢやな』

と云うては見たが、直ぐに思ひ返したのか、急に眞面目になつて、

『ぢやが、常軌を逸せんやうにな』

と、不得要領な注意を與へた。



一體八代大尉は平素から勇斷決行を以て任じてゐるので、すでに著港後間も無い頃、私

に向つて、

『廢王リ、オカラニを訪問ねて、慰めてやらうと思ふから、一緒に來い』

と誘はれた。此方も突飛者であるから、一も二もなく賛成して、愈々行らうといふ段取に進んだが、その間際になつて艦長に發見かり、

『總領事が迷惑すると不可んから、まア見合せろ』

と止められて仕舞つたことがある。這麼腕線揃ひだから、有繋の猛艦長も手加減の必要を感じたものと見える。併し开塵心配は無用に了つた。といふのは、その夜の王黨演說會なるものが、相當激越なものもあつて、一時は聽衆中から呼應者でも出るかと思はせたが、假政府の取締嚴重のためでもあつたらう。何事も無くして夜半散會を告げたので、さしも意氣込んで來た八代大尉は、眉間に八の字を寄せ、二三度強く頭を振つたのみで一語も吐かず、寂寞として同僚と共に歸艦すると、艦橋には艦長が双眼鏡を手にして頻に陸上を眺

めてゐるし、上甲板には陸戦隊が出發準備を整へて、いざとならば瞬間に上陸して、我居留民には指一本指させじ、と勇氣勃勃々々出發命令を待つてゐた。

◇
仍て陸上の一伍一什を報告すると、艦長はさも不興氣に、

『さうか、仕方も仕方がない』

さうしてコト／＼と艦長室へ降りてゆかれたが、艦で從卒に酒を持來たらせる聲が漏れた。是は日清開戦後の話であるが、内地よりの風の便に、ハワイ王黨が勤王の旗擧げしたといふ報知があつた——尤も直ちに鎮壓されたやうだが——すると艦長は微笑して舌打ちならし、

『なんだ今頃行つたのか、先月開けた麥酒のやうぢやね。これが本當の布哇(沫)立たずか』

と、洒落のめしたが、後は何も言はなかつた。是も禪味といふものだらう。

佐久間艇長

東郷元帥の重々しい口から、今もなほ折に觸れては

『彼れは感心じやつた』

と賞讃の辭が出るのは、明治四十三年四月十五日午前十一時頃、廣島灣新港沖に沈没し、乗員一同死に至る迄皆能く其職を守り、自若として逝いた第六號潜水艇員の死狀である。

古語に、慷慨死に赴くは易く、從容義につくは難し、というてるのは洵に穿つた言で、平時に於て不意に遭難し、死に直面したといふやうな場合には、忠誠の一念燃ゆるが如きものにあらざれば、恐らく取亂さずにはゐられまい。然るにも拘らず、特に艇長佐久間勉大尉の如きは、死期一秒一秒に迫つて、呼吸絶えなんとするに至るまで、苦悶を忍んで部下

を指揮すると共に、その顛末を記録に留め、陛下の潜水艇を害ひ奉り、併せて部下を殺したる自己の罪を謝し、沈没の原因、沈没後の状況、處置、部下の忠實、潜水艇乗員に對する將來の希望等を述べ、更に部下の遺族をして窮することなからしめ給はんことを願ひ奉り、從來世話になつた將校の名を列記して訣を告げてゐる。眞に一字一血といはうか、全身精神の結晶と評さうか、たゞく絶語の崇高さで、天地もために泣くであらう。



されば博士號を返還し、大宰相の招宴を『執筆多忙』の一言に勿ね付けた高抗の文豪夏目漱石すら、其遺書を読んで涕淚滂沱、感激の餘り病床に筆を呵して、『文藝とヒロイック』なる短篇を草し、暗に自然派の文士に對して、ヒロイックの潑刺たる生證文としてこれを提供し、得意の皮肉を浴びせながら、大體斯ういうてをる。

『余は近時潜航艇中に死せる佐久間艇長の遺書を読んで、このヒロイックなる文字の、われ等と時を同じくする日本の軍人によつて、機械的の社會の中に赫として一時燃焼せられたるを喜ぶものである。自然派の諸君子に、この文字の、今日の日本に於いてなほ眞個の生命あるを事實の上に於いて證據立て得たるを賀するものである。かれ等の腦中よりヒロイックを描く事の憚かりと恐れとを取り去つて、隨意にこの方面に手をつけしむるの保證と安心とを與へ得たるを慶するものである。往時某國の潜航艇に同様不幸の事のあつた時、艇員は争つて死を免れんとするの一念から、一所にかたまつて水明りの洩れる窓の下に折り重つたまゝ死んでたといふ。本能の如何に義務心より強いかを證明するに足るべき有力な出來事である。本能の權威のみを説かんとする自然派の小説家はこゝに好個の材料を見出すであらう。さうして或手腕家によつて、この一事實から傑出した文學を作り上げる事が出来るだらう。けれども現實はこれだけである。その他は嘘であると主張する自然派の作家は、一方に於いて佐久間艇

長とその部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。さうして重荷を擔うて遠きを行く獸類と選ぶ所なき現代的の人間にも、またこの種不可思議の行爲があるといふ事を知る必要がある』(春陽堂發行切抜帳より)

と論じて、人間——特に日本人には本能以外に尊崇すべき本性が嚴存し、機に觸れては發揮するこの事實を、虚偽扱することが出来るか、と堂々たる態度で筆陣を張つてゐる。

以上の記載を読まれた方々は、勿論佐久間艇長が、單に武勇一邊の軍人でなく、猛烈よりも沈着、勇敢よりも誠實の人であることを觀取せらるゝであらう。が、それにしても多數の讀者中には、同大尉を、或は虎髻逆さに生えたる荒武者で、情とか愛とかいふ優しい心は、藥にしたくも見當らないやうな人物だらう、と想像さるゝ方もないとは限らない。所が、それとは全く反對に、同大尉は眉目清秀、風采閑雅の美青年で、一流の名優中にも、

匹敵するものがすくない程な容色の持主であつた。加之愛にもまた稀らしい位の眞劍味を有つてゐながら、夫に惑溺して本分を粗略にするやうな事は毛程もなく、この點からいうても、正しく一般青年の模範者である。

私は第六號潜水艇遭難の當時、海軍軍令部に奉職して居り、且つ佐久間艇長が同郷の先輩として兄事した名和少將(後の大將)の配下たりし關係もあつて、この事件の公報と共に、詳細な説明書を起稿して新聞紙上に發表し、且種々それに與つた因縁を有つてゐるの如く、斯く尊敬すべき青年將校の眞相を、一層精く世間に知らしめるため、同大尉が最愛の夫人を亡うた際、慰められた一先輩に對し、情を竭し、理を盡して答へた長文の書面があるから、その一部を爰に紹介しようと思ふ。私はその書面を讀む毎に泣かずにはゐられない。讀者も恐らくは同感を起さるゝであらう。

(前略) 數ならぬ身に常に御心寄せ給はり、誠に感涙の極みに御座候。お蔭を以て益々健全に誠心奉公大切と相勵み、傍ら體育に注意致し居候間、乍他事御放念被下度候。現世無常とは覺悟致し居りたるもの、實に希望の頂點より絶望の深淵に投込まれたるこの身には、笑ふ花の春景色も秋天の寂寞と選ぶ所なし。聊か平素信ずる所あり、幸に悲哀に過ぎ、落膽の淵に沈み、或は自暴して健康を害ふの愚は學ばざる積りに御座候へども、さりとして人間誰かこの境遇に處し、折りに觸れ涙なきを得んや。此の山彼の野昨年今日この頃妹背の契り短かりし亡き友を誘ひ、摘菜に公暇の一日を過ごせし事など思ひ浮かぶる毎に無限の感に堪へず、人知れず袖を絞り居候。一日の課業終り、人々は愛のホームに急ぐ時、小生は獨り海兵團に赴き、擊劍柔道に腕を鍛へし後、水交社に清浴し、最終の定期にて艦に歸る、これ唯一の樂み、乾燥無味なるものに御座候。回顧するに、去歲母を哭してより爾後一身上の不幸相踵ぎて至る、自

ら持するに至誠を以てし、敢て他に一步も譲らざる覺悟なれど、斯く然るは未だ己れが誠の足らざるゆゑと深く慚愧の至りに堪へず、只管自省を力め居り候。(中略) 不幸後差當り當惑仕りしは稚女の處置に候ひき(中略)。思ふに、この兒亡き愛者の忘れ形見なり、健全に養育し、彼女の語りし理想の如く教育し、これを見ること恰も故人の如く、その成人を樂まば、故人に對する追善、亡き靈の慰安これに如くもの無からんかと信じ候に付、五月以後は郷里に送り、乳離れの出來得る頃まで然るべき人に里子に預くる事に決心致し候。不幸の當時小生が失望落膽の結果、或は自棄に陥らんことを慮かるの好意より、親戚その他同情深き知人より早く後繼者を選定すべきの忠告周旋有之候ひしも、生來守る所ある小生には斯かる心配の必要無く、今日に及候夜更けて萬籟寂たるの時、思ひは馳せて稚女の上にあり、如何にして將來完全に之を教育せんか、身は概ね海上の勤務自ら監督せんは不可能に屬すれば、むしろ適當

なる後継者を娶らんかと存候ひし事もあれど(中略)、若し人選を誤らば爲めに風波絶えざる不愉快なる家庭を造り、愛子の不幸を招くべく、夫よりは孤獨操を守り、遺兒の養育につきては更に後顧の煩ひ無き良策を講じ、以て餘生を清く剛く潔く送るにしかずとも存居、これはや、悲觀に過ぐるの毀言たるを免れずとは存じ候へども、實に將來清濁の岐る、所一步を誤らば回復すべからざる一層深き愁淵に陥ること、寒心致し居候。(中略)

世の中に戀しき者は父母の外にあらじと思ひしものをとの古き譬へも、今わが身の上に試し見て、いと同情の念まさり、道行く時も、傍に嬉々たる少女の餘念も無く遊べるを見ては、萬感交も起り、覺えず立ち止りて眺め申候。(中略)この上如何なる人生の悲惨事重來するも、至誠一貫、正義の精神を彌よ堅持し、以て公務に奉じ、老父に仕へ、人生の本分を全う致し度存念に候へば、幸に御安心被下度候。(下略)』



私は漱石氏の生前に、この手紙の一部分でも示したかつた。さうしたら定めし感激もし、同情もして、更に力ある批評を遺して呉れたらうにと、返すべくも惜しくてならない。

武夫はもの、哀れを知る、との言葉は、いひ古してあつてやつぱり新らしく聞き得られるね。儒教では、仁者は必ず勇なりといひ、佛教では、大悲の力と喝破し、西人も、愛は力なりと叫んでゐるでは無いか。言葉は違ふが、意は一なので、要するに、眞の勇氣は同情より起る、といふことに歸着する。さうしてその根柢は生々化育の天地の大道に基調したる、人間至純の眞心に外ならない。私はこの理趣を應承して、さて佐久間大尉の夫人令嬢に對する慈愛と、あの最期の壯烈さとを照考すると、尊い人生哲學を痛烈に味はされるのである。

水軍と海戦



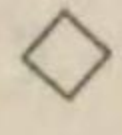
海はどこまでも詩的だね。

三十三反、帆を巻きあげて

蝦夷地離れりや、佐渡ヶ島

何といふ晴れ々とした情調だらう。斯うした短い俗謡をも翫味し來ると、そこに海國民の面目が躍如としてゐるのでは無いか。現今のやうに飛行機や自動車や活動する時代ならいざ知らず、駕籠か馬脊で、一日に精々十五六里の旅行しか出来なかつた昔時にあつて、蝦夷から佐渡まで一跨ぎとの觀念を起させたのは、全く海路の賜物で、同時に又養成せらるるのは、雄大と優美の精神である。同じ事でも、海賊の大將といふと、志しを得ざる多

恨の英雄が、大船の舳に立つて、明月を仰ぎつゝ、感慨に耽つてゐるやうな氣がするし、山賊の首領と來ると、たゞもう慘忍で猛惡で、恰てバルチザンの同類で、もあるやうな暴男が想念されるよ。是れは主として海そのもの、性質から促されるためのやうだ。繰り返していふ、海は洵に詩的である。



斯くの如く誘導性に富んでゐる海に取圍まれたわが國民が、その性を受感しない筈がない。これに同化してゆくのは必然の結果で、それが即ち海事思想といふものである。さればわが國民のこの思想は、所謂神代の太古より意外に發達し來たり、恐れながら神武天皇の御東征、神功皇后の御遠征等が好結果を奏したのも、皆この思想の發展に外ならない。一體海事に關する官職の具體的に整設せられたのは、應神天皇の御宇（昭和三年より千六百五十餘年前）のやうであるが、その中に韓海部首といふ官職がある。これは歸化海人部

を掌ると共に、韓海をも支配してゐたやうに思はれ、これに徴するも、當時の海事思想が如何に旺盛であつたか、窺知せられるては無いか。近來わが國に來遊する歐米の諸名士達は、何れも申し合せたやうに、われ／＼海軍軍人に向ふと、貴國の海軍は創設後僅々五六十年来に過ぎないのに、這麼にまで立派になつたのは、實に世界の奇蹟である、とお世辭半分賞讃して呉れるが、考へて見ると、わが國民の海事思想史を無視した事にもなるので、それ程有難くも無い譯さ。

なる程徳川幕府は國民の海外渡航を禁じ、大船の製造をも許さなかつた。が、それは政策の犠牲に供した一時の現象で、國民的海事思想の根柢は、それがために微動だも受けてはゐないのだ。否管に受けてゐないのみならず、或意味に於ては、反つてそれが蓄積せられて、恰も爆發前の火山のやうな状態になつてゐた。そこへ持つて來て、歐式海軍の設立

となつたから堪まらない、磐梯山の如く櫻島の如く何でもかんでも吹飛ばすといふ荒まじい勢ひを顯現する様になつたので、實に不思議でも奇蹟でも無い當然の事なのさ。で、若しまだ不審が晴れないとなら、その一證として昔時の水軍といふものを研究して見るさ。興味本位からいつても、頗る面白いものだよ。さてそれについて逸話があるから、序に話させてもらはう。

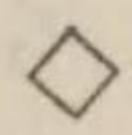
日露戰爭中、東郷大將の智囊として、機略縱横、鬼才の名を恣にした秋山眞之中佐（後の中將）が、まだ少佐（？）であつた明治三十二年秋と覺えてゐる。胃腸病で長興病院に入院された事があつた。そこで見舞に行つて四方山の談話のついでに、昔時の水軍の事に及んだ。さうしてそれに關する寫本を見せようと約束して、同時に私が起稿した帝國海上權力史の草稿をも送つて批評を求めたのである。すると、翌年の正月八日付で次ぎのやうな

手紙が来た。その中には拙稿に對して過賞の辭があるので、柄にも無く鼻白む心地がするが、何をいふにも彼我共に壯年血氣の頃なのだから、俗にいふ樂屋内の氣焔として大目に見てもらひたい。

『拜啓過頃拜借の戰史（談者曰く戰史とは權力史の事である）並びに海外交戰考讀了致し候に付、一先返上仕候。その中三島流舟戰要法壹冊は少々寫し取度點有之爲、今暫く借讀仕度候。戰史における帝國海上武力の盛衰興廢が國運の消長に及ぼせる影響その他原因結果に關する御觀察の周到なる、御斷案の適切なる、唯々敬服の外御座無、乍此上一日も早く御上梓被致、部内は勿論部外無眼者に一讀せしめ、その無識を啓發するを得ば、帝國將來の利益可不少と奉存候。實にそれを讀味して過去興廢存亡のよつて起る所以を討究せば、今日この蕞爾たる小島上に小權の爭奪を止め、舉國舌少くも舉軍一致國閥を以て地球の表面に土權を争はざる可らざる道理

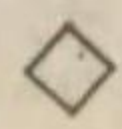
明瞭なるに、兎角世間には歴史讀みの歴史知らずが澤山なるには御同様嘆息の至りに御座候。兎に角貴著帝國海軍史の如きは、一日も速に上版公示さる、事國民上下の教育上最も必要と思考致し候。小官本日歸横、來る十三日頃再び上京可致、なほ全流戰法の書その節拜借致し度候。勿々頓首』

爾後引續いて秋山少佐は水軍の研究に没頭し、頗る熱心なので、私は所有してゐるこれ等の凡ての關係書類を提供して、その研究に資した。後年同少佐が、東郷大將の幕僚として對露戰役に従事し、戰術等に關し種々獻策した中に、多少は姑く措くとして、この水軍戰法の精神に則つた點があることは、私は信じて疑はないところである。



そこで水軍と海戰——特に日本海海戰——とを比較論證して見たいのであるが、それに先立つて水軍の成立と歴史との大要を述べることにしよう。

支那の王充論衡といふ書物の中に、周の成王の時、倭人鬯草を贈るといふ記事がある。鬯とは一種の香草で、支那古代では、この草を黒黍の酒に和したものを宗廟に供へて祭典をしたさうである。それは兎も角周の成王といへば、わが國では神代に當るので、勿論確實の事は分らないが、海を航して大陸に渡つたものがあつた事は、臆げながら察知されるので、前にも申した海事思想が意外に早く發達して居つた一證とも見られるのである。爾後益々進歩して漸次堅牢なる船舶をも造り、その操縦や航行の方法等も熟達して來て、遂には隊を組み、敵に當るやうになれば、規約を設け、統一を圖る必要が生じて來るのは自然の勢ひである。是れが即ち水軍の起つた所以なので、神武天皇の御東征を初めとして、神功皇后の三韓御征伐、續いて推古天皇の朝に至るまでの十五回程の海外遠征等は、固より舟師（即ち水軍）によられたのであるから、それ／＼戰術書があつたに相違ないが、殘念ながら今日に傳はつてをらない。



所が天智天皇の御即位前七年、韓半島に於て、わが軍が唐軍のため大敗したので、是非なく從來樹立してゐた半島に於ける勢力を抛ち、専ら退嬰主義を取つたので、海事思想は衰へる、雄大な氣は無くなるといふ有様になつた。さア斯うなると、從來とは反對に、外國からもつけ込まれもつけ込まれた。新羅が侵入する。その歸化人が叛する。高麗が侵入する。刀伊が侵入する。遂には得體の分らぬ南蠻のこそころまでが御多分に漏れず、大手を振つて御入來とまでなり、押す／＼の大繁昌の擧句が、元寇十萬といふ大珍客の御來臨を辱うしたので、勃然として長夜の眠りより醒めた國民は、攻撃は最上の防禦だと覺つた結果、此方からお見舞申すことになり、八幡船や胡蝶軍の出現となり、かの史家を『倭奴刀を揮ふこと神の如し、人これを望めば輒ち懼れて走る』『華人未だ見ずして心先隕つ』と、記さしめ、そんじよそこの平和論者から手厳しいお叱言が出さうな始末

となつて來た。

◇
 又一方國內では南北朝對立時代となつて、兩方の者が各地方に入混じつてをるので、陸路互に氣脈を通ずることが困難なため、水軍を組織して海路を利用し出した。斯くして水軍は段々整備發展し、續いて足利幕府より群雄割據時代までが、その最も流行活躍した時代である。さうして海賊といふ名は水軍の別名となり、その棟梁は政府から海賊大將軍といふものに任せられてゐるから面白いではないか。海賊好きのバイロンにでも聞かせたら、躍りあがつて喜ぶだらう。

◇
 何事でも何業でも、尊重されるやうになると傑物が出るね、水軍もまたこの理に漏れず、伊豫の豪傑村上義弘は、北條氏の末路に内海の諸海賊を征服して、自らその大將軍となり、

一流の水戦法を案出してこれを海賊流と名づけた。流義としては是れが一番古いやうだ。續いて吉野朝の忠臣北畠顯家の孫三人が、能島、因島、久留島に分住し、互に水軍を研究して一流を立て、三島に縁んで三島流と稱した。私が秋山少佐に最初に見せたのはこの戦法書であつた。その外のは、出處を略して名前だけ擧げて見よう。

- 野島流
- 一品流
- 菅流
- 甲州流
- 九鬼流
- 川上流
- 逸克流
- 和泉流
- 磐尹流
- 當流

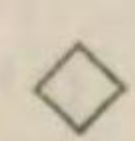
全流
 そこで、これ等の戦法書について記載の條項を調べて見ると、何れも大同小異で、大體、法令、陣法、兵器、氣候、潮汐、航海等に章を分け、乗員の種類、陣形の變化等を教へてゐるが、煩はしいから、凡て略するとして、何流を問はず、對敵の大綱は、概ね次の三點に歸するやうだ。

○常に敵を包圍するやうに運動する事。

○わが全力を以て敵の分力に乗じ得るやう進退する事。

○主として先づ敵の將船(旗艦)を狙ふ事。

これから愈々日本海海戦を拉し來つて、解剖臺上に置き、水軍戦法のメスを執ることにしよう。



世界の戦史あつて以來、無比の大勝を得たといはる、日本海海戦は、その大勝に關してもとより色々な原因があらう。が、先づ第一に注意すべきは、敵を待ち受けてゐる際、東郷大將が將士をして技術の猛訓練をなさしめると共に、その精神の激勵に最も力を竭した事で、未だ戦はざるにすでに忠義心に勝ち、自信力に勝ち、勇氣に勝たしめてゐたのである。水軍書も『先づ勝つてしかして後に戦ふ』と教へ、『不敗の地に戦ふ』と教へ、『人を致して人に致されず』と教へ、『舟を攻めずして人心を攻む』と教へ、『敵の氣を奪ふ』と教へ

へてゐるではないか。

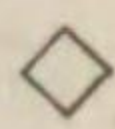


更に又對馬海峡から日本海にかけて戦争が起つたとするなら、われは主戦、かれは客戦となるのであるから、われに取つては一層大切であるとは、東郷大將の嘗て言明せられた所である。所て水軍主戦の註に『主戦とはわれ亭主となり、かれ客となるの意なり。主戦は客戦と違ひ、兵糧その他も求め易いけれど、勝利を得ざる時は國の存亡にかゝるゆゑに客戦より重し』との意味で論じてゐるのは妙ではないか。

次に愈々敵艦隊が出現した際、わが主力たる第一戦隊(東郷大將直率)、第二戦隊(上村中將直率)は、鎮海灣を出動して沖島の北方約十哩の地點に達し、そこで敵を待ち受けてゐると、第三、第四、第五、第六戦隊は、敵と接觸を保ちつゝ、これを主力艦隊所在の方へと誘うた。これが水軍でいふ『豹陣』と『虎陣』とに當るので、その説明に、斯う

いふ意味が記されてある。

『虎の妻を豹といふ。これを用ゐて敵を誘はゞ、敵侮りて追ひ來るに相違なかるべく、わが思ふ壺に引寄せて、亭主の虎現れ忽ち敵を嚙殺す。これを豹陣、虎陣といふ』
振つてゐるね『虎の妻を豹といふ』『亭主の虎現れ』、アフリカ原野の光景を髣髴し來る所、無限の興味が湧くではないか。



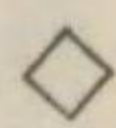
儲これからが、全勝の最大原因を説明する順序になるのである。

開戦の當初は、彼我共に縦陣（敵の先頭は二列縦陣）にて相接近しつゝ、あつた。されば其のまゝ、進航を續けたなら、雙方五分五分の形勢で互に行過ぎるやうになるのである。所がこんな月並な事で満足する東郷大將では無い。實に大將には、國家の興廢を雙肩に荷うてゐる外に、更に明治大帝の御前に於て全勝を誓ひ奉つた大責任があるので、是が非で

も敵艦隊を木片微塵に打ち砕いて、宸襟を安んじ奉らねばならないのだ。今や彼我相迫つて一萬米突となり、九千となり、八千となり、戦機熟して間一髪の場合となつた。旗艦三笠の艦橋に屹立して敵を睨んでゐた大將の眼がギロリと光り、右手を高くあげたと見る間に、颯と左方に一振された。

『取梶！』

艦長の號令が力強く響いたのはその刹那であつた。



斯くして東郷大將は斷然針路を左折し、以て敵の前面を遮り、その秘術の『丁字』陣形を敷いて、思ふ存分敵の先頭を掩撃し、全砲力を集中して敵二列縦陣の旗艦を先づ撃破し、敵全軍の兵氣を挫いて仕舞つた。是れが全勝の主因である。

この二列縦陣は、水軍の『衡軛の備』といふのに當るのである。衡軛とは、車の長柄の

前にある横木の事で、左右兩列互に相助けるの意だ。又敵に對して東郷大將の取つた掩撃の態は、水軍でいふ『鶴翼の備』に相當する——尤も『鶴翼の備』は船首を敵に向けてゐるのだが、彼我の戰術的關係からいふのである——『鶴翼の備』といふのは、恰も鳥の兩翼を張りたる如く、敵に對して兵船を横に並べ、敵の包圍攻撃するに用ゐる陣形で、東郷大將得意の『丁字陣形』と全然同一精神である。さうして斯う教へてゐる。

『敵衝軛に備へ來れば、われは鶴翼を以て押包みて打つべし』
又別にこんな意味の説明もある。

『先づ水戰の初めに、敵の先頭に立つ一艘に、味方の數艘が攻めかかり、やにはに夫を撃ち破るべし、二三艘も沈むれば敵全體の勢ひくじけるものなり』
益々以て一致してゐるのは不思議に思はれるばかりである。



續いての戰況は、わが第一戰隊が北方を塞ぎ、第二戰隊が東方をさへぎり、いはゆる『乙字陣形』に變じた。これを水軍に照らすと、『正奇の備』といふので、即ち一は正面から敵を挾撃するのである。

斯くて一日にして殆ど勝敗の數は定まつたのであるが、こゝに注目すべきは、われは終始單縱陣を以て戰つた事で、單縱陣は即ち水軍にいはゆる『長蛇の備』である。水軍書は、その利ある點を斯う説いてゐる。

『これは大蛇の横たはる形をいふなり。長く備へて左に敵を受くる時は右より助け、右に至れば左より救ふ。中に懸かれば左右より討つ。これは陣法の根元なり。四頭八尾にして相助けるといふはこの陣の心なり。形は何にてもあれ、この心を呑みこみたる時は變化自在なり』

何んと移して以て單縱陣の立派な説明となるでは無いか。



以上は明治卅八年五月廿七日の書戦であつて、その夜は驅逐隊、水雷艇隊の活躍となつてゐるのも、水軍の『敵船敗れたる時は夜討ちすべし』に合するし、翌日戦鬪が所々に分れて、而も統一が取れてゐるのは、水軍の『散舟その志しを一にす』を實現してゐる。斯く大觀し來ると、水軍即海軍で、わが臣民と海事思想の關係には、昔も今もあつたものでは無い。何にしてもたのもしい事で、實以て人意を強うするに足るね。

戦役後、私は日露海戦史の編纂委員を仰せつかつたので、東郷大將から提出になつた戦鬪詳報の附圖の訂正に著手した際、屢々秋山中佐と會合して相談した。或日私は冗談に、海戦航跡圖をかぎまはして、フンク言ひながら秋山中佐に向ひ、

『どうも、どことなく水軍のにはひがするやうだね』

と言つたら、中佐は、例の通り少しく顎を突き出してちよつと頭を曲げ、

『白砂糖は黒砂糖から出来るよ』

と笑つてゐた。

兩雄意氣投合

今七月四日は合衆國獨立祭の日だね、殊に今年の十一月には大統領の改選もあるので、一億三千万の同國國民は、一層意義深い氣持を以て當日の盛典を祝したのであらう。それに關聯して、私は端なくも、同國第二十六代の大統領セオドル・ルーズヴェルト氏の「雄大豪快」さが思ひ出されてならないよ。

一體ル氏の一生は、四字に盡きてゐるので、恐らく彼れ自身も、之を以てその生命と信じてゐたであらう。人の孤兒寡婦を欺いて天下を取るに倣はんや、との意氣が、その性行の上に躍動して、想念しただけで胸がすつとなるではないか。



怪傑を以て自任しながら、存外ニコボンの骨を得てゐた獨帝が、アフリカ猛獸狩の歸途ドイツに立寄つた彼れと共に寫眞を撮り、その裏面に「世界の平和は君と余とによつて保たるべし」と記し、得意満面で彼れの前に差出した。

すると夫を一瞥した彼れは、肺腑をも射通さんばかりの眼光でちつと獨帝を見詰めたまま、一言も吐かなかつた。さすがの獨帝も彼れを見返す事が出来ず、目をよそへそらして仕舞つたさうだ。千兩役者の腹藝くらべ、定めし面白い場面であつたらう。

斯ういうたなら、どこからかお小言が出るかも知れないが、彼れは正義護持の觀念よりして、非常な軍備擴張論者であつた。米國が過般の世界大戰に参加して出兵と決するや、彼れは直に四人の子息を戰場に送り、一人を死なせ、一人を負傷せしめたにも飽き足らず、彼れ自身も出征を出願してゐるのだ。その當時彼れがニュー・ヨーク市で出兵反對論者の攻撃演説をなし、

『今や米國は舉國一致して敵と干戈を交へてゐるのに、時節柄をもわきまへず平和を叫び出兵に反對するなどは、言語道斷の非國民だ』

と大喝するや、聽衆中より、『それならなせ君は從軍しないのだ』と横槍を入れたものがある。それと聞いたル氏の面上には、見る／＼痛烈の氣が漲つて、底力のある聲はあたりに響いた。

『その事なら大統領ウィルソン氏に聽け、余はもとより出征の覺悟で志願をしたのだが、大統領は之を許容しないのだ。併し自分は代償として四人の男の子を悉く出征せしめてをる』

斯く叫びながら横槍を入れた者を指さし、

『この國家の一大事に際して國を過まるものは、汝の如き畜生のあるがためだ』

と巨眼をむいてグツと睨むと、相手は其處へ居すくんで仕舞つたさうだ。痛快では無い

か。これではどうしてもわが武士道謳歌者にならずにはゐられない筈だ。

果して彼れは人道に立脚してわが國の將來に多大の期待を持ち、親友の金子子爵に、斯ういつたさうだ。

『余は、日本はどうしても東洋の盟主として、之が指導に任せねばならぬと考へる。西はスエズ運河を限り、北はカムチャッカに至るまで、日本の勢力範圍を擴大せしめ、すでに歐米各國の權利に屬してゐる場所は別として、その他の未進國を發展すべく誘導することは、日本の最大急務だと信ずる。これについて米國は決して容喙しない。少くとも余の生存中はこの言に背かない事を誓つて置く』

彼れは斯くまでに日本を諒解し、日本魂を諒解し、つひに東郷大將をも諒解するに至つた。さうして日露の平和克復したる明治卅八年十二月十八日、當時大統領の職にあつた彼

れは、次ぎの一書を東郷大將に寄せ、自署した寫眞を送つて來た。

『 그리스コム公使に託し御惠贈相成候 奉銃、かたじけなく受領致し候。閣下は本年中に當合衆國へ御渡來相成べき趣 同公使より傳承、切にその事實たらん事を祈り、白聖館において親しく閣下に接し歡待致し度熱望に耐へず候。封中肖影一葉幸に御受領相成候は、本懷不過之候。』

これに對して、東郷大將は翌卅九年一月廿九日、斯ういふ返書を出した。

『肅啓貴簡並に貴影謹んで拜受仕候。小官はこの賜物を以て大共和國大統領閣下友情の表彰として深く尊重し、永久大切に保存可仕候。近き將來に於て白聖館にて閣下に拜謁するの光榮を得ることは、小官の切に希望する所に御座候得共、貴國訪問の件に就ては未だ何等の決定も無之候爲、御確答仕兼候儀恐懼の至りに存候。』

封入仕候 小官寫眞一葉 幸に御受納被下候は、光榮不過之候。 敬具



斯くして兩者は爰に未見の知友となり、精神と精神とは一道の靈光すてに相通ずるに至つたのである。で、大統領の手紙を私に示されたので、私は切に米國訪問を勧めて見た。すると大將は『其の中には好い機會もあるじやらう』と答へられたが、大統領の好意に對しては、頗る感銘してゐたやうに見受けられた。氣の合ふといふのは妙なもので、諺にある相縁奇縁ともいふのであらう。ルーズヴェルト大統領が、前掲の書面を發送してから二日経つた十二月二十日には、わが聯合艦隊の編制を解かれることになつたので、同司令長官たる東郷大將は、翌二十一日を以てその解散式を舉行し、麾下一般に一片の訓示を與へた。それが英譯せられ、幾くもなくして大統領の手許に達した。何がさて大の東郷最眞の事として、早速披見し、熟讀翫味の揚句、減多に他に許さない彼れが甚深の感動に打た

れ、『天下の明文じや、軍人の金科玉條じや』と、歎賞のあまり、遂にこれを合衆國陸海軍に與ふる命令中に引用（談者曰我歴史を述べた部分は省略した）し、以てその軍人を戒飭するに至つた。斯くの如く、外國軍人のアドレッスを大統領が、その命令中に引用したといふ例は、ワシントン以來未曾有の事ださうで、又以て彼れが如何に東郷大將を信重して居るか、推知される。さうして、かれは早速わが米國大使館付武官谷口少佐（現大將吳鎮守府司令長官）を招いて、その顛末を告げ、さも心地よげに微笑みつゝ、斯うつけ加へた。

『この事はきつと東郷大將にも興味を與ふるだらうと思ふので、該命令書の寫しを貴官に贈るから、夫を東郷大將に送付し、併せて余の好意を傳へられたい』

斯くて程なくその命令書の寫しが、谷口少佐を経て東郷大將の手もとに届いた。それは

相應に長いものだが、ル氏の爲人を知る上にも、東郷大將と心友たるを證する上にも、頗る大切なものであるから、全文を掲載する事とした。どうぞ辛抱して讀んでもらひたい。

陸（米國陸軍の意）一般命令第四十一號

左記大統領の書簡は之を陸軍一般に布告す

一九〇六年二月二十四日

臨時陸軍卿の命に依り

參謀長 陸軍中將

ジェー・シー・ベーツ

東郷大將は東亞の戦争に於て偉功を奏し、古今著名なる海將の班に列せり。而してその聯合艦隊を解散するに當り、麾下一般に與へたる訓示は、實に千古不易の玉條にして、陸軍省一般命令中に挿入して然るべきものと思惟す。

夫れ精銳なる武人は精銳なる陸海軍を形成する根本なり。武人をして精銳ならしむる

要素は世界各國敢て異なることなし。而して武人各々、この要素を具へざるべからず。武人の要素とは何ぞや。勇氣、決斷、智慮、練術、修學の志、克己の心、並に強健なる身體これなり。苟もこの要素を具へざれば、精銳なる陸海軍を造ること能はざるべし。然り而うしてこの要素ありと雖も、至當の準備即ち平素の練磨を缺くに於ては、その精華を發揚すること能はざるなり。陸軍と海軍とを問はず、苟且にもわが米國の將卒たらん者は、一旦事あるに方り、克くその本分を盡すの道は一に平素の準備にあるの理を銘記し、常に孜孜怠るべからず。平時安逸を貪る將卒は、戰に臨みて敵に破らるべし。且つこの理を銘記すべき者何ぞ獨り陸海軍に限らんや。わが合衆國の如き進歩せる大共和國に在りては、陸海軍は決して國民の意思以上の働を爲すこと能はざるものなれば、わが國民は、國家の聲譽を辱めらるゝ勿らんことを、自己は勿論子々孫々に至るまでその責任として服膺すべし。如何に平和を愛する國民にても、

時に或は蹶然起ちて戰はざる可らざるの場合あらん。この時に方り、直接に國家の聲譽、國旗の光榮を擁護するの責任に當るものは陸海軍人なりと雖も、國民にして豫め之が備をなすにあらざれば、彼等軍人何ぞ能くこの責任に當るを得んや。吾人は強大なる陸海軍を備へざるべからず。強大なる陸海軍は精銳なる軍器を有せざるべからず。然れども特に必要なるは、平素孜孜として心身の修養練磨に努め、軍器の使用に慣熟し、戰爭の重なる責任と辛勞とに堪ふるの素地を造るにあり。

東郷大將の訓示は、吾人に關係なき部分を省略するに左の如し。

『二十閱月の征戰すてに往事と過ぎ、わが聯合艦隊は今やその隊務を結了してこゝに解散する事となれり。然れどもわれ等海軍軍人の責務は決して之がために輕減せるものにあらず。この戰役の收果を永遠に全うし、なほ益々國運の隆昌を扶持せんには、時の平戰を問はず、先づ外衛に立つ海軍が、常にその武力を海洋に保全し、一朝緩急

に應ずるの覺悟あるを要す。而して武力なるものは艦船兵器等のみにあらずして、之を活用する無形の實力に在り。百發百中の一砲能く百發一中の敵砲百門に對抗し得るをさとらば、われ等軍人は主として武力を形而上に求めざるべからず。近くわが海軍の勝利を得たる所以も至尊の靈德に頼る所多しと雖も、抑々また平素の練磨その因を成し、果を戰役に結びたるものにして、若し既往を以て將來を推すときは、征戰息むと雖も安んじて休憩するべからざるものを覺ゆ。惟ふに武人の一生は連綿不斷の戰爭にして、時の平戰に由り、その責務に輕重あるの理なし。事有らば武力を發揮し、事無くばこれを修養し、終始一貫その本分を盡さんのみ。過去一年有半かの風濤と戦ひ、寒暑に抗し、屢々頑敵と對して生死の門に出入せしこと固より容易の業ならざりしも、觀ずればこれまた長期の一大演習にして、之に参加し、幾多啓發するを得たる武人の幸福比するに物無し。豈之を征戰の勞苦とするに足らんや。苟も武人にして治平に

儉安せんか、兵備の外觀巍然たるも、恰も沙上の樓閣の如く、暴風一過、忽ち崩倒するに至らん、まことに戒むべきなり。

◇
(中略)我等戰後の軍人は深く鑑み、既有の練磨に加ふるに戰役の實驗を以てし、更に將來の進歩を計りて、時勢の發展に後れざるを期せざるべからず。若し夫れ常に聖諭を奉體して孜孜奮勵し、實力の滿を持して放つべき時節を待たば、庶幾くば以て永遠に護國の大任を全うすることを得ん。神明はた平素の鍛練に力め、戰はずしてすでに勝てる者に勝利の榮冠を授けると同時に、一勝に満足して治平に安んずる者より直ちに之を褫ふ。古人曰く勝て兜の緒をしめよと』

余は苟もわが合衆國の武力の一分子たる者、時に一分子たらんとする者、並に他日啓蒙の不幸を見ると、國民の信任に孤負せざらんと期する者に、敢てこの訓示を進

むる者なり。

一九〇六年二月廿一日

大統領 ルーズヴェルト

陸軍卿宛



さすがはルーズヴェルトだ。よくも思ひ切つて斯程までに未見の外國人に感服したものだね。私は大將よりこの書類を示された時、何だか自分までが大知己を得たやうな愉快を感じたので、大將に向つて

『これこそ本當に肝膽相照すといふもので、ルーズヴェルトは閣下を取つて確に知己の一人ですね』

といふと、沈着な大將も悪い氣持はされないと見え、莞爾として

『眞面目じゃ』

例によつて簡明適切、唯一語に深長の意味を籠めた。

一體眞面目か否とかいふのは、大將が人物試験に用ゐる顕微鏡なので、嘗て私に斯ういはれた事がある。

『人間に一番大切なのは眞面目といふことじゃ、少し利口な奴共は直ぐに横着心を起して不眞面目になり努力を嫌ふじゃ、これが不可ん、さうなると他人に信用を失ひ、少しばかりの才氣などは何の役にも立たなくなる。であるから若い人達は、たとへ迂愚と笑はるゝも、愚直と誹らるゝも、終局の勝利は必ず眞面目な者に歸するとの確信を有つことが肝要じゃ』

私はこの誨を服膺して、自分自身を鞭撻してをるが、動ともすると不眞面目になりがちで困つてゐる。

機縁は熟し時節は來て、遂に東郷大將の合衆國訪問が實現することになつた。それは明治四十四年六月同大將が、依仁親王同妃兩殿下に隨行し、英國皇帝の戴冠式に參列する事になつたのが動機である。それと聞いた合衆國民は、永年の希望を達するはこの時と許り、猛烈運動をはじめたうとう目的を達し、大將は戴冠式後、ロンドンにて殿下にお暇申し上げ、大西洋を経て國賓として谷口中佐を從へ、八月三日ニュー・ヨークに到着した。

一體合衆國民は、不思議な心理の所有者のやうだ。共和主義や民主主義を高唱するにも拘らず、一面では熾烈な英雄崇拜熱を藏してゐる。是も東郷大將が話された事であるが、『合衆國海軍軍人達が、ボトマック河を上下するに當り、ワシントンの墓畔を通過する際は、必ず總員整列最敬禮を行ひ、肅然たる人々の面上には、目前にワシントンが立ちゐるのではないか、と他人に思はせるまでに敬虔の念が漲つてゐたには感服した

よ』

これも一ツは英雄崇拜心が手傳つてゐるのではあるまいか。

それは兎も角もとして、當時の東郷大將の歡迎振といふものは、實にすさまじい程で、中には這麼ことまで言つた者さへあるとの事だ。

『東郷は今や世界の東郷となつた。従つて或意味に於ては、又吾人の東郷でもある。されば之を歡迎するに何程の熱心を示したからとて、誰に懸念も斟酌もいるものか。思ふ存分に行るがいい。これは吾人既得の權利である』

歡迎に權利とは面白いね、その稚氣満々たる所に米人氣質の一面が活躍してゐて、如何にその東郷熱の盛んなるかを證するに足るであらうが、斯うまでに至らしめたのは、ルーズヴェルトが大統領時代から、口を極め精神を傾けてなしつゝある宣傳が、與つて力ある

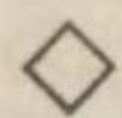
事は争ふべからざる事實と思ふ。

◇
大將上陸後、ニュー・ヨーク市役所に市長ゲーナーを訪問した際の如きは、大將の自動車は、太く逞しい駒に打ち乗つた五十名の警官によつて前後を護衛せられ、其復た前にはオートバイに乗つた六名の警官が驅けて雲霞の如き見物を拂つてゆく。さうして大將通過の際は總ての交通機關を停止したにも拘らず、非常な雑沓を極め、熱狂した群集は拍手喝采ハンケチを手巾を打ち振り、咽喉もさけよと『トーゴー』『トーゴー』を連呼し、なだれを打つて大將の自動車に近寄らんとするので、幾百人の警官は大汗になつて、此處を先途と防禦に盡し、辛うじて自動車を通し得た程の空前の盛況を呈したので、同行せる我水野總領事はきもをつぶし、『一體米人は大將の何國人かを知つてるのかね』と、谷口中佐に私語いたといふ事である。

◇
尋いで、翌五日ワシントンにて、公式にタフト大統領を訪問の際は、大將は禮裝に改めて内田大使と自動車に同乗し、米國騎兵第十五聯隊より付した一隊の儀仗兵に護られ、白聖館へと向つたのであるが、雲集せる市民は十重二十重に人垣を造り、建並ぶ兩側十數階の大厦高樓の、窓といふ窓、屋上といふ屋上は、悉く人頭もて填められ、打ち振られる日米兩國の國旗は、五色の雲が漂ひるるかと思はれ、大將は百雷の如き歡聲を浴びせ續けられた。と、當時の新聞は報じてゐる。

◇
さうしてその晩は白聖館に於ける公式晩餐會の主賓となつた。是を皮切に晝夜を分たぬ諸方面の歡迎責に遇ひ、終にジェームス・エムベクをして『我が國民は歡迎に熱中しあり、大將は彼等の深切の爲めに殺さるゝこと勿らんを祈る』といはしめ、有名な漫畫子は、大將が大瓶より迸るシャンペン酒に打ち倒され『參つた』と叫びつゝ、泣き顔してゐる所

を描き、多大の利益を獲たさうだ。



斯うした幾十の歓迎の中でも、づば抜けてゐたのは陸海軍俱樂部を訪問した時で、偶々同俱樂部では、大統領用の椅子を新調して、まだ一度も使用しないものがあつた。それを正面に据ゑ、固辭する東郷大將を無理に之に掛けしめ、先任將官は蠻聲を張りあげて、

『此の椅子は何たる幸福者であらう。彼れは今日世界の名將軍によつて、掛開を行はれたのである。さうして當俱樂部第一の寶物兼記念品となつたのである。我々はここに謹んで、東郷大將閣下の御健康を祝すると同時に、當椅子の無上の光榮を慶する』との意味を述べると、建物も動ぐばかりの喝采が起り、大將は穴へも這入りたき風情でうづくまつてゐたとは、さぞかし困却せられた事であらう。

私が大將訪米の話をする目的は、ルーズヴェルトとの會見を記すにあるのだから、その他の事は總て省略したいのだが、ただ一つ大將がワシントンの展墓をした事だけは述べさせてもらひたい。といふのは、それが世界的記念の場面であると同時に、幽明兩界における二人の君子的英雄が、人道の極致に對する感應默契は、他の精神にも響きを與へ、汚濁の思想界を刹那の間でも、淨い光明に觸れしめ得るからである。

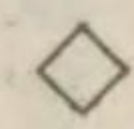


八月六日ヴァーノン山上に於て、東郷大將が、合衆國國祖ジョージ・ワシントンの墓前に進める莊嚴の光景を見よ。瑩域の大鐵扉は左右に開かれ、大將は脱帽して徑二尺餘の花輪を捧げつゝ、肅々として圍の内に入り、花輪を墓前の鐵架に供へ、先づワシントンの墓に向ひ、うやくしく禮拜して後暫時黙禱し、尋いで夫人の墓をも禮し、脱帽のまゝ徐かに墓前を退いた。

その間、同行の内田大使をはじめ、合衆國海軍卿代理以下數名の將官及び接伴員等は、

入口に整列して敬意を表し、靈氣四邊に漂ひ、大將の面上は得もいはれぬ感激の色を浮べてゐた。その時同伴した一人の將官は、後他に向つて斯う語つたさうだ。

『人格高い東郷大將が、伏目勝に國祖の墓前に進み、うやくしく一禮した光景は、實に好個の畫題で、そのあまりの崇高さに、余は涙が出た』



斯様な狀況であつたから、待ちに待つた諸新聞紙は、筆を揃へてその記事を掲げ、讃辭をつらねる大層なにぎやかさであつた。今その中から一新聞の記事を抜萃して見よう。

『ワシントンの墓前に立てる東郷大將は、東洋の文明が泰西の文明の前に立つものは無いか。ワシントンは日本を知らなかつた。日本は過去に於いて永く隔絶の帳に閉されてゐた。有名なペルリの日本行は、世人が記憶してゐるだらうが、現代日本の勃興は、十九世紀の中葉の豫言者が、如何に想像力を逞しうしても、到底豫想し得な

つたであらう。さうして日本が今日の地位を占めたについては、東郷大將が與つて力ある事は言ふまでも無い事で、露國はその艦隊が日本海に全滅し、陸軍が奉天に大敗するに及んで始めて和を乞うたのだ。ワシントンは戦争に敗れて戦役に勝つた。幾度戦争に敗れてもかつて沮喪せず、大局に着眼して終局の勝利を占めてゐる。ワシントンの墓前に立つた東郷は、意味深長な歴史の實物教訓である。この兩人は愛國心が相同じいのみで、いちじるしく異なつた文明を代表してゐる。それにつけても、日本の十年の進歩は實に驚くべきもので、世界の家族中に高き位地を占め、少からず他國の恐怖心を惹き起した。わが國民は兩人の經歷及びその代表する二國の國性を研究し正解せよ。然らば相互の利益必ず大なるものがあるであらう。さうしてそれが又幽明界を異にこそすれ、兩英雄の素志にも叶ふ事と信ずる』

然り、私も亦、兩國民が相互にその國性を正解することを切望して已まないのである。

前大統領ルーズヴェルトの屋敷は、ニューヨークより廿餘里を隔てたオイスター灣サガモアー丘の森の中に建てられた簡素な木造である。さうして玄關を入れれば、右は書齋、左は應接室で、少しの裝飾もないが、彼が大統領であつた時代には、各國大使の國書捧呈をこゝで受けたといふ尊い由來つきの室である。

東郷大將が同邸を訪問したのは八月十三日、同日午前十一時四十五分マンハッタンのペンシルヴェニア驛より臨時列車に投じ、午後零時四十分オイスター灣に著き、同所に待つてゐたウッドフォード少將の自動車でサガモアー丘に向つた。これより先きその通知を受けてゐたルーズヴェルトは、満身に溢る、喜悅を以て、夫人と共に質素で然も眞情の籠つた歓迎準備をなし、今か今かと大將の到着を待ち焦れて、遂には玄關に立出て、廣い車寄せを彼方此方と逍遙してゐた。そこへ大將の自動車が著いたからたまらない、感情を制して

體裁をつくるなどの、小細工を超越した親味に浸つてゐる快傑は、大將が下立つと、同時に驅けよつて

『オ、親愛する東郷、よく來てくれた。本當によく來てくれた、余は甚麼に待つたらう』

さうして懐しくてたまらぬ様子で、頑丈な左右の手をヌツとさし延べ、同じく雙手を出した大將の手をウンと握つて打ち振り、『嬉しい』『嬉しい』と繰返し叫びつゝ、抱へるやうにして廣いコロニヤル・ホールに案内した。

そこで大將は、改めて初對面の挨拶をなし、土産として本邦より携へてきた金銀細工の鎧の飾物を箱のまゝ贈呈した。するとルーズヴェルトは、恰も小兒がクリスマスのお菓子の包を明ける時のやうな熱心を以て、箱を開け、鎧を取出すや、

「オ、綺麗」

と叫んで飽かず見入り、大將よりその説明を聞くと、例の『嬉しい』『嬉しい』を連發し、直ぐにそれを飾棚に置き、再び大將の腕を抱込んで應接室に導き、夫人に紹介した。

斯くて大將一行は、主人夫妻が心を籠めた午餐の饗應に與り、食事が終ると、主客共に打ちくつろいで、それからそれへと樂しげに笑ひ興じ、或は戰爭談に、或は名勝談に、いづ果つべしとも見えなかつた。するとルーズヴェルトは立上つて、一口の太刀を捧げつゝ、座に戻り、態容を正して大將に向ひ

『これは貴國の天皇陛下より贈られたもので、余が第一の家寶であるから、お目に掛ける』

とうやうしく手渡した。

一體ルーズヴェルトが、壯年時代より、深く明治天皇を尊崇し奉つてゐたのは著名な事で、御治績を始め、その他大帝に關し奉ることは細大となく知悉してゐて、眞に世界第一の偉人におはすと、甚深の敬意を捧げてゐるのである。従つて此の太刀をも、彼れは決して物質視しないで、それから偉大な教訓を感受してゐるやうな様子であつた。されば固より謹嚴な大將は、兩手に之を受けて押戴き、引抜いて凝と見入ると、鈍細に匂深く、所々に稻妻閃いて地鐵青く澄み、天晴の業物と見受けられたが、油が凝結してゐる場所があつたので、その旨を主人に語り、私が手入して進せようと、つけて贈られた打粉をうち、拭をかけて、油をひき直し、靜かに鞆に收めて返上した上懇切にその保存法を傳授した。するとルーズヴェルトは『多謝、多謝』と繰返して、深くその好意を謝し、續いて日本に於ける武士道と刀劍との關係について種々質問し、大將はその歴史の概要を物語つた。

此の際通譯として大將に隨行してゐた水野總領事は、後或人に兩雄の會談について、こんな話をした。

『午餐前にルーズヴェルトは、その書齋の壁に懸けてゐる色々の記念物について大將に説明したが、食後暫くその席を離れた際、夫人は大將に向ひ、同じく壁間に掲げある小旗を指し、微笑ながら、「ルーズヴェルトはこの旗について何か申し上げましたか」と問ひかけた。そこで大將は、「いや何も承はりませんが、由緒でも御座いますか」と反問した。すると夫人は淑まじやかに、「實はこの旗はルーズヴェルトが初陣の時、敵より奪つた大隊旗なので、何時も得意になつてお客様にお話するので御座います。が、大方閣下の御功績が餘りに大きいので、はづかしくて、申し上げられないので御座いませう」と返答したので、大將は頭を打ち振り、「否左様な道理は御座いません、

私の微功も閣下の御勳功も、時と處とこそ違へ、國家に盡す覺悟は一で、責任と配慮とに何の差異がありません、といつてゐる所へ、ルーズヴェルトが戻つて来て、この問答を聞き知ると、夫人に向つて、御身は言はでもの事をお話したものだね、閣下の大功に對して恥かしい極みだ」と乙女のやうに顔赤らめながら、改めて大將と熱烈な握手を交したのは、實にゆかしい光景であつた。又この會合の際、簡にして含蓄ある大將の言葉を、その通り通譯するには頗る苦心した』

かれこれする中に午後三時となつたので、盡きせぬ名残を惜しみつゝも、大將は主人夫婦に別れを告げた。

『オ、もう戻らるゝか、余がこの邸は、既往幾多の名士を迎へたが、未だ閣下のやうな榮譽ある人を迎へた事がない。恐らくは將來に於てもさうであらう。さらば閣下よ、

益々御健勝で、國家並に人道のため全力をお盡し下さい』
夫人は双眼に涙を湛へて、熱烈な握手を交し

『今日はようおいで下さいました。私は主人と共に永久に今日を記念し、毎日お贈物を見、閣下にお目に掛かつたつもりで、お懐かしさを感め、御健康を祈りませう。呉々も御機嫌ようのらせられませ』

有繫沈著な大將も、この誠實籠つた別辭には深い感動を受けたものか、微に顫を帯んだ音聲で慇懃に重ねて別れを告げ、自動車に乗つて邸を辭した。折しも涼風颯と吹いて、残暑の苦熱は何處へやら。

◇

それから間もなく、大將は合衆國を辭して丹波丸に乗船し、同國艦隊司令官の指揮の下に、二隻の巡洋艦に灣外まで送られて歸朝の途についた。

今年の春であつたか、東郷元帥と談話の折、ふとした事から談話がルーズヴェルトの事に及んだ。すると元帥は

『彼がゐるたならなア』

と、さも感慨深げに歎息せられた。洵に同感だ。意氣投合といつても、この兩人のやうなのは稀であらう。兩人とも信仰の英雄であつて、同時に至誠の勇士である。

東郷元帥曰く

『天は正義に與し神は至誠に感ず』

ルーズヴェルト曰く

『神を畏れよ而して汝の義務を盡せ』

私は初対面から丈に劫かされたよ、明治二十五年の春、私は匿名で「金波集」といふものを出版した。併しそれが私の作だと露顯して仕舞ひ、大いに物議を醸したが、持ったが病で、どうも仕方がない。それには別段職務を怠るといふのでなし、この方面から忠孝を鼓舞しようとするのだ。何構ふものか、と若氣の至りさね。最も得意の作だった知盛名馬の別れと、五郎正宗の至孝との二段を、豫て知つてゐた義太夫三絃の名人、鶴澤清六翁に頼んで節付してもらひ、それが出来上つたので、翁の三味線で、その弟子清蝶が、語初をするることになつたのは、丁度その年の七月下旬であつた。そこで同好の知人十數名を招待した中に、硬骨の勤王畫家として有名であつた川邊御楯翁も這入つてゐたので、定刻にやつて来たが、一人の美青年を連れてゐた。これが即ち新藏丈であつたのだ。

◇

ところが彼れは御楯翁が市川新藏というて紹介したにも拘らず、傲然と開き直つて、拙

者——ひどく力を籠めて——は岡本録太郎、自今御別懇にと、こゝは少し臺詞めいてゐた。それから二段とも濟んだところで、色々な批評は出ても、概ね紳士の辭令批評——むづかしい熟語(?)だ——が多く、つまり結構に出来ましたといふに過ぎなかつたが、獨りわが新藏丈だけは、大きな黒眼鏡をギラつかせて、些も遠慮會釋もなく、或ひは褒め或ひは貶し、こゝは文章として讀むには好いが、語るには無理だとか、これでは舞臺につけられないとか、皮肉のやうで深切な批評を試みた擧句、

『知盛は確に大物だが、下手がやつたらだれてしまつて、見られたもんじやアありません。語るにしても素人受けのする艶ばかりに骨ををるやうなヒョロ／＼太夫に、どうしてこれが消化せるものですか。當今なら先づ綾瀬だらうね。劇なら勿論知盛を師匠、知章を拙者がしたら唸らせませ。その他の者だつたら、憚りながらおん眼をつぶらせ候へだ』

と、萬丈の氣を吐いて、左右を見渡し收まりかへつてゐた。私は彼の批評よりも人物がすつかり氣に入つてしまひ、自後友人の一人として隔意なく交際を續けた。

◇

て、或時何處かの席で、偶然九代目に會つたので、談話の序に新藏の事を褒めると、九代目はちよつと暗い表情になつて、

『彼奴は大變見込があるので、頼母しく思つてゐますが、考へた事を、場所も場合も構はずにツケ／＼いふので、どうも仲間受けが悪くて困つてゐます。それを本人はかへつて好い事にして、貴方がたのやうな學者（學者といはれたには尻こそばゆい心地がした）様と許り交際たがつてゐますのさ。それに今から餘りこれに（この時兩手を握つて鼻の前に重ね）なると藝が延びませんから、折があつたら時々振つてやつて下さい。それでなければ本當の御眞様とはいはれませんね。無暗に本人の氣に入るや

うな事ばかりいつたり、又は他の惡口をいつたり、煽動たりして、本人を天狗にして仕舞ふのは、幫間も同様で、それが商賣なら仕方もないが、お客様としては、第一不見識ではありませんか。私は毎々弟子共にいひ聞かせてゐるのです。狂言中にお客様に大向のお客様が、手をたゝいたり、大聲で褒めたり、甚いになると聞くに堪へない様な譯の判らぬ言を被仰る方もある。勿論興づいての上には相違はないが、あれを自分の藝が巧いためだと思つたら大間違ひだぞ、お客様が本當に感動なされたら肅然となる筈だ。又さうおさせ申すまでに、藝を研かねばならないとね。否、これは飛んだ御説法で、さぞ片腹痛く思召したてせうが、まア新藏の事は何分よろしくお願ひ申します』

◇

沁々と斯ういはれた時は、私までが意見されてゐるやうで、成程一藝の長者になる人の

心懸けは偉いものだが、これも一つは新藏丈を大成せしめんと師匠の慈愛からだなど考へると、何だか眼頭が熱くなつたので、よし何かあつたら師匠の意を傳へてやらうと待つてゐた。すると明治二十六年十一月一日から開場になつた明治座の新作『石橋山源氏旗揚』に、新藏丈は小名柄平太といふ源氏方の武士と北條時政の二役であつて、小名柄平太に扮した時だと記憶してゐるが、無暗矢鱈に槍を振廻すので、相手の俳優は無性に危険がつて、彼方へ逃げ、此方へ避ける様子が、眞實の上に嚴い鎧武者と來てゐるので、自然に滑稽の上乗なるものが出來上り、ワッ／＼といふ笑ひ聲を擧げて、見物の嬉しがること一通りではなかつた。

◇

私は苦々しく思つてゐると、或新聞の劇評に、私の考へと同じやうな事が書いてあつて、しかもその終りに『まさか金波樓主人(私の號)の直傳でもあるめえ』とひやかしめいた事

が付け加へてあつた。そこで丈がやつて來た時、その事について忠告すると、豫期の如くなか／＼諾といはないで、

『いや一應御尤もだが、あの時分の槍は必ずしも突くばかりではない。多くはあれで敵勢をぶつ拂つたものだ、或物識が教へてくれたのです。どんなものですか』

と、むしろこつちをへこましたかのやうに、得意満面の體であつた。

『成程、それが君の藝術觀か。僕は實際を美化し、理想化したのが藝術で、實際を實際のまゝにすればいゝといふなら、藝術なるものは容易なものだと思ふがどうかね。僕は藝術には全くの門外漢で何も知らないが、僕が藝術家といつても主に俳優諸君に望む處は、この濁惡の人生を美化して見物をしてせめて觀劇中だけでも安樂の念に浸らせようと心懸けてもらひたいね。まアこんな議論は暫く措いて、君は今實際々々と、ひどく實際がるが、それならよくあるあの刀の柄の手のかけ工合なぞ、全然成つては

るないぜ。あんなに腕の曲部を前方に突き出して威張つてゐるうちには、相手から抜き討ちに腕をやられてしまふよ。心得のある侍が刀の柄に手をかける時は、居合腰に少し腰をもちり加減にして、左手は刀の鞘を抱くやうにつかみ込み、右手は柄にかけて、之も同じくびつたりと成るべく胸に着け、相手が先を取つて切りかけても、此方も抜きざまにガッチリ受け止め得られるやうに構へるものだよ。併しそこが劇だ。従來のやうにする方が仰山で華やかならそれでいゝ。槍だつてさうだ、誰でも槍は突くものと思つてゐるからね。實際はどうあらうとも、見物の理想を實現させれば、それが寧ろ藝術の本旨に叶ふものでは無いかね。君はどう思ふ……』

私には勿論藝術観など有らう筈はないが、議論の行掛りもあり、彼れの態度も多少癩にさはつたので、駄辯家の本領を發揮し、條理も理窟もあつたものでは無い、喋つて喋つて

喋り抜いた上、丁度好い機會だと考へたので、先般九代目が丈の前途を心配して私に話した一伍一什を、眞向から浴せかけた。すると夫までは鼻の頭に嘲笑を浮べて、下目づかひをしてゐた彼れは、遽に居住を直し、耳傾けて謹聽し出したが、段々に頭を垂れ、終に懷紙を取出して幾度も鼻をかみ眼を拭つた。さうして涙聲で途切れ〜に、

『否拙者が悪う御座いました、そんなにまで師匠が心配してゐてくれるのでせうか。』

あ、濟まなかつた、屹度これからは心掛を改めますから、御覽なすつて下さい』
彼れの面上には決然たる色漲り、冒し難い覺悟が閃いたので、私はなほも繰返して彼れの取るべき道を説いた。

それからの彼れの態度は確に改進を示し、敬ふべきを敬ひ、服すべきを服し、捨己従人技藝の研究に精進するやうになつたのは、有繫に名人の素質を具備してゐるなと頷かれ、

忠告甲斐があつたのを大いに満足した。

技藝に熱心な彼れは、或時斯ういうた。

『先日お話になつた實際の藝術化は承はつたが、夫には實際を知つてからの藝術化でなければ駄目でせう。知りもしないもの、藝術化呼ばはりは一種の空想に過ぎないものとなり、眞の藝術化し得よう筈が無いと思ひますね。ついてはたての必要上、劍術の型を知りたいのですが、教へては下さいませんか』

私も型の稽古は、書生で伊庭塾にゐたころ、心形刀流のを少しばかり教はつた事があるが、もう大概失念してゐる。併し知らないといふのも業腹なので、忘れた箇所はごまかすまでと、丈に意見した所を、自分では平氣で犯す淺ましい料見を押し隠して

『よし教へよう、何事も早い勝だ。今夜はすぐに取かゝらう。竹刀で行るから立ち給へ』



姿臺舞の藏新川市

それから始めたが、彼れの熱心さには驚いてしまった。八時頃からやりだして、十二時近くなつてもまだ止めない。一體君歸るのはどうするのだ、と訊ねると、いや手廻しのいい事、車夫はもう疾うに歸して仕舞ひ、徹夜で教はる覺悟だ、と凄まじい權幕、併しさうくく續くものではないから、いまにへたばるだらう、と多寡をく、つて相手をしてゐると、一時になつても二時になつても止めようといはない。

◇

本當に夜通しやりさうだ。さアさうなると、此方が甚だ心細くなつて妥協したかつた。併し苟且にも軍隊生活をしてゐる者が、疲勞れた故止めて呉れとは言はれた義理で無いから、眠いやら空腹やらを我慢して、惘々然と型通りを機械的にやつてゐると、彼れも實は極度に疲勞してゐるので、譬にいふ蠅が燈心を使ふやうに、澁面つくつて彼方へヒョロ／＼此方へヒョロ／＼、終ひには齒軋して尙足らず、ドシン、ヅシンと、のべつに尻餅の

つき通しとなつたが、到頭一通り覚えてしまつた。さうして夜は明けてゐた。萬事この調子だから上手にもなる譯さね。

月日は流れた。日清戦争は起つた。さうして皇軍連戦連勝し、九ヶ月にして媾和は成り立ち、我々も目出度凱旋して相變らず太平樂をならべてゐた。所が間もなく、畏友の八代少佐(現大將男爵樞密顧問官)が、ロシアの公使館付武官に補せられ赴任することになつたので、私は一夕その送別の小宴を紅葉館に張つた。其席上、談端なくも新藏丈の上に及ぶと、八代少佐が頻に會つて見たいといひ出した。そこで私は使に手紙を持たせて迎ひにやると、幸ひ家にゐたとて、直ぐにやつて來たので、八代少佐に紹介せ、歡談頓に反跳んで來た。

◇
聽て少佐は色々の話の擧句、準備が出來ると、

「君は、什麼心持で舞臺に立つね」

と質問した。すると新藏丈は言下に答へた。

「何時も面白くてたまりません」

「フム成程、何時も面白いとは法悦の境だ。何業でも其處まで到達すれば占めたもの、感服だ。仍て一つ貴君に所望があるが、何か踊つて見せて下さらんか」

「行りませう、地に困るが、女中衆にやつてもらはう、一つ願ひます」

此時分彼れはもう大分眼痛が悪くなつてゐたが、それにも拘らず、準備が出來ると、袴の襷積を直し、扇子を取つてすつくと立上つた(何の踊であつたか失念したのは残念だ)。何がさて當時一といつて二と下らぬ若手俳優の大立者、加之容易に酒席などで踊るところか、滅多に顔出しも仕ないといふむづかしやが、女中の地で踊るといふのだから大變だ。女中から帳場から板前から別席のお客まで館内總出の有様で、縁側でも入口でも人垣造つ

ての大騒ぎ、地を弾き下方に當たる者も、一世一代の光榮と氣合を充した調鮮かに、吹立てた第一聲の笛に伴ひ、二節三節と妙音響く三味、太鼓につれ、新藏丈の身のこなしは序・破・急の勘を押へて、乍ちゆるく乍ち疾く、ひらりと揚がり、はつと伏し、右に流れて左に飛ぶなど、胡蝶を凌ぐ輕妙さに、觀衆恍惚として魅了せられ、高く吸呼する者さへなかつた。



中にも八代少佐は、兩手を膝に端然として、また、きもせず見入つてゐるが、やがて一曲濟むと、ほつとばかり感嘆の聲を漏らし、

『えらいものだ、どうだあの踊つてゐる態度は、凜として寸分のすきもない。おい伊庭君』

隣席にゐる伊庭想太郎氏を見返つて、

『あアいふ際にたやすく打ち込めるか』

『然様さ、無理に打ち込めんことも無いが、兎に角隙は無いといつていゝな』

『さうだらう、何しても今夜は非常に愉快だつた。新藏君厚くお禮をいふ。聞けば君は大分眼が悪いさうでは無いか、日本劇壇のため、大いに自愛して呉れ給へ。わが輩も三年程すれば歸朝するから、その時はまた益々圓熟した妙技を拜見させてもらふ。』

まア一杯やり給へ』

新藏丈は、どうしたのか眼をうるませて、

『いや拙ない藝をお褒に預かつて痛み入ります。お言葉を忘れず勉強致して、御歸朝の上は更にお鑑定を願ひませう。どうぞ貴方も御自重遊ばして滞りなく御歸朝あるやう、必ずお待ち申してをります』

斯うした不思議な縁で、勇將と名優の間には、一脈の温かい血が通つたのだ。然るに八

代少佐が歸朝した時には、丈はすてに天王寺畔の冷かな墓石の下に永久の眠りについてゐた。併し勇將が極をつけた寸分の際なき藝風は、不滅の力となつて、冥々裡に何人かに傳はつてゐるに相違ない。さらば新藏丈は肉に死して藝に生きてゐると觀られるね、だが惜しい事は矢張惜しいよ。

觀音と忠僕

私は深く感ずる所があつて、弊家傳來の千手觀世音の小尊像を、去る六月廿六日護國大觀音建立會に寄贈した。同會では喜んで受納してくれ、追つて大觀音建立竣工の上は、右小尊像を御胎籠佛とするさうで、私もこの上なく満足してゐる。

この護國大觀音建立會といふのは、昨年來朝野の歴々方によつて發起せられ、相模大船驛の附近なる無我相山上に建立せらるゝ筈で、高さ十丈の聖觀世音の御座像が、紫金色の御姿を雲表に輝かして、慈眼衆生をみそなはし、妙智の力に世間の苦を救はんず御有様を示さうとするのである。

斯くの如き淨業であるから、私も前述の小尊像を寄贈したのだが、同像には色々の因縁がまつはつてゐて、その話が或は結縁になるやうな事もあらうかと思ひ、大要を述べるのであるが、それには順序として右尊像の産婆役をつとめたといふべき、一老僕の經歷から始めねばならぬ。

老僕は山口用助というて、弊家の舊領地肥前唐津在嚴木村に生れ、嘉永元年十五歳から大正五年八十二歳に至るまで、實に六十八年弊家に盡してくれたのである。もとより、彼れは忠實一點張で、名聞も欲しがらない、利益も欲しがらない、主家の爲めなら生命も欲しがらない、南洲翁のいはゆる始末のわるい人間なのである。が、自身は如何に隠しても、又他人の善事は吹聴したがない世相でも、彼れ程の律儀者になつたら誰れもだまつてはゐない。やれ村(當時代々幡町は村であつた)の名譽の、郡の光榮のと善事を擧げるに吝ならぬ、有徳の大人が彼方此方に出來、終に府廳に上申する事になつた。そこで府では數



忠僕用助翁と觀音の靈像

年か、つて嚴重な調査をしたところ、真正銘紛ひなしと極めがついたので、明治四十五年の今月今日（七月廿日）東京府知事阿部浩氏より、木杯一組に、次ぎの賞状を添へて用助に贈つて來た。

『資性廉直幼にして能く父母に事ふ（談者曰く彼れは幼時評判の孝子であつて涙ぐましい色々な逸話を遺してゐるが餘り煩雜になるから凡て略して仕舞つた）。年十五出でて唐津藩主に仕へ、以來こゝに三代六十四年、その間維新前後世局多難に際し、藩主の命を銜み他藩に往來し、また藩士の従者となりて屢々危地に入りしも、忠實能くその任務を全うせり。曩に老衰の故を以て骸骨を乞ひしも、忠勤老衰に及ぶを愍み許されず、然れども猶ほ素餐を屑しとせず、請うて門衛となり、また邸内を洒掃してその分を盡しつゝあり。他の奴婢その薰化する所となり、皆能く主に仕ふといふ。以て至誠人を動かすものあるを知るべきなり。洵に奇特とす。之によつてその賞の爲め木杯

そののみか、彼れはこの一年前に、乃木大將をへこまして同大將より硬骨漢とほめられ、六年前には、東郷大將より、忠僕とたへられた光榮者であるから、その顛末の大要を述べて見よう。

白露の戦役後、聯合艦隊が解散せられて、東郷大將が海軍軍令部長に轉職し、陸上勤務となられたのは、明治三十九年十二月二十日であつた。何がさて諸方面で待構へてゐた同大將の歡迎會は、それからそれと引きりなしに招待して來るが、大抵は辭退して應じられない。それでもよんどころ無いものだけでも相應に多く、翌年にまで持越して、折角の休暇も潰れ勝ちなので、偶には身體の靜養もされねばならぬ。それには拙宅へでも來られるのが一番氣樂だらうと考へたので、『どうですお出になりませんか』と勸めて見た。すると

即座に『ム、お邪魔しよう』と承諾せられ、四月二十一日の正午過ぎから夫人令嬢同伴、めづらしく和服姿でアラリと來られた。

空に雲なく地に風なしといふ麗な日和で、日向は汗ばむくらゐ、寒氣嫌ひの大將には、詭へ向であつた。此方でも全然他人まぜずの家族ばかりで、氣樂專一に暢然と萬事儀式ばらず、新芽匂ふ梅林にて茶菓を勧め、一休憩の後竹藪へと案内した。その途中家祖を祀つた小祠の側を通りかゝる。

丁度祠内の掃除を了つた老僕用助が、扉を開けて顯はれたのに出會つた。世事に無頓著な彼れも、有繫に東郷大將の英名は聞及んでゐるし、今日見えられることも承知してゐるので、つか／＼と進み寄つて、彼れが平素の癖なる兩手を合せてグツと下げつ、丁寧にお辭儀をし、九州訛まるだして『御機嫌よう』とやつた。すると大將は『はい』と慇懃に會

釋を返して後、じつと見詰めてゐるが、私を顧みて『鹿兒島ですか』と問はれたゆゑ『いや唐津です、彼れは私方の名物男として面白い經歷を持つてをります』と答へると、『さうですか、永く居るのかな』『さう約六十年になります』『六十年、そりや永い』こんな話でその場は終り、大將の筭掘りとなつた。筭掘りはちよつと呼吸の要るもので、先づ地面に出た筭頭の曲り工合で付根のある方面を推し、そこを槍のやうな筭突きでズンとやる。根が切れて筭が完全に飛び出すのである。ところが大將のお手際、海戦のやうに鮮かとは、お世辭にも申し上げかねる。出る奴もく、胴切の極刑に處せられてゐるので、夫人や令嬢は、『また切れてる』『また切れてる』と、腰を曲げてころがらんばかりに笑はれる。失禮をも忘れて家族も吹出す。大げさにいふなら、笑聲ドッと四方に擧がるの光景裡にあつて、例の如く泰然自若たる大將は、われ關せず焉の態度で、師匠番たる下男に教はり教はり五本目に始めて完全なのを掘り出し得たので、ホッと一呼吸して道具をなげ出し、『何て

もむづかしいものだ』と、ポタ／＼垂れる顔の汗を拭はれた。

それより土筆、野芹、娶菜などの摘草に打ち興せられ、半日の清遊果て、粗餐を呈した後、婦人連は別間で琴の調べに耽り、大將には、家寶の刀劍類の鑑定を乞ひ、四方山の談話のついで、話頭端しくも老僕用助の上に及んだ。そこで私は彼れが忠實の點について、大略次ぎのやうな物語りをして大將の清聽を煩はした。

日清戦役より續いて臺灣の征討に従事してゐる私は、明治三十八年八月下旬、乗船高千穂が横須賀に凱旋したので、久々て家庭の人となつた。丁度その夜の十二時頃、寢室に眠つてゐると襖の外方で、

「隊長這入つても可いか」

観音と忠僕

と唐津訛の聲が聞えた。そのぞんざいさ加減といひ、第一私の事を隊長と呼ぶものは、用助より他には無いのであるから、勿論直ぐ彼れと覺つたので、

『かまはん、這入れ』

と答へると、彼れは何か長い包物を抱へ、せい／＼呼吸を切らせながら這入つて来て、平素に似ず神妙に襖際に畏まつたので、私も床の上に起直り、

『這麼に遅くどうしたのだ、おまけにせい／＼呼吸を切らして、何か急用でも出來たのか』

と、や、詰問的に訊くと

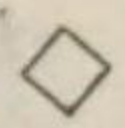
『さうぢやア御座んせん、俺は往つて來たのだよ』

『往つて來た？ 何處へ？』

『谷中へ！』

『谷中へ？』

『ム、谷中の御隠居さんとこへ』



判つた！ 彼れは亡父の墓へ參つて來たのだ。それにしても、何の必要があつて、這麼に遅く三里もある所を、勿論徒歩で往つたのだらう、と矢張不審は晴れなかつた。

『何故又今夜に限つて往つたんだい』

『俺はどうしても今夜往つて御隠居様に、隊長が禁庭様のために偉い手柄をして戻つて來た事を、申上げなきやア濟まないからさ。俺はお役中（亡父が幕府の老中就任中をいふのである）も戦（維新前後の戦争をいふのである）の時も、いつでも側（そば）にたがの、その苦勞ちうものは、とても話にもならん。それでどうだお國の事を思ひながら、仕舞には朝敵ちう悪者にされて、江戸にもゐられず、長いあひだ何處に御座

つたか知れないで、俺は斯うして觀世音（彼は常に觀世音というて決して觀音さまなど、はいはなかつた）に御守護をお願い申した』

いひつゝ、彼は左の掌を示した。彼は亡父が明治元年三月三日江戸を脱走したと聞いた時、無事安穩を祈るがため、日頃信仰する觀世音の御像の前に端座して、掌に油を湛へ、燈心を垂らし、それに點火して掌のジリ／＼焼け爛れるをじつと耐へ、この荒行を三日三晩も續けたさうな。さうして、その時の焼け痕は、今も歴々と遺つてゐて、彼れが誠實を永に物語つてゐる。



彼れはまたしても今それを示して述懐するのである。

『觀世音の御利益は有難いよ、御隠居様は無事で五年目に戻つて御座つた。さうして俺に斯ういうたよ、賢之進（私の幼名である）に忠義のさせて、禁庭様にお詫をする』

感慨極まつた彼れは、得堪へずや節搏立つた兩手に顔を被うて、暫時聲が途切れたが、やがて再び述懐を續けた――

『隊長が今日立派な手柄をして歸つて來たのだ。早く御隠居様に知らせたいよ。什麼に待つて御座るか分らない。さう思ふと迎も明日まで待たれないから、用が濟んで出かけて今戻つたのさ』

さうして彼れは持參の包を解くと、中から拵付蠟鞆の大小二口の刀が出て來た。彼れの説明によると、これは幕末擾亂の際、重大な密使を果した功により、亡父より手づから授けられたもので、折があつたら私に譲りたいと、永年考へてゐた所、今日のやうな好機は無い。『よし遣らう』斷つて置くが、彼れは到頭死ぬまで國言葉が改まらなかつた上に、だれにでもぞんざいであつたが、取り分け私には遠慮がなく、相當紳士(?)にもなつた者をつかまへて、昔ながらに懷中から燒薯を出し、人前も構はず、さア遣らうとくるの

で、毎々恐縮させられた。

◆
今の刀もこの流儀なのだ。併し私は恐縮どころか眼頭が熱くなつて、頼には返事が出ない——結局有難く受納して、彼れを満足させる外はなかつた。又彼れは私の出征中雪が降らうが風が吹かうが、毎夜十二時を合圖に床を蹴つて起き、ざア〜と水垢離をとつてから、家祖小祠の靈前に合掌して、曉天に至るまで讀經を續け——というても十句の觀世音經より知らない筈だから、恐らく之を繰返しく〜やつたのであらう——皇軍の勝利と私の武運長久を祈つてゐた。その態度が餘りに熱烈嚴肅なので、それを見た者は、孰れもその心根に泣かされたさうだ。

◆
如上の長物語を飽きもせず『ウム』『ウム』と聽いてをられた東郷大將は、話が濟むと

拱いた腕を解かれて

『忠僕ぢや』

力強く頷いて切々たる様であつたが、その中には無限の同情がこもつてゐた。私は改めて、

『如何でせう、極小さく南無觀世音とお書き下さいませんか、それを用助に遣はしたら、どんなにか悦びませうから』

『僧越ぢやが、此方(談者曰、自分の事を此方と言)ではれば書きませう』
平素揮毫の依頼には、容易に諾と言はない大將が、二つ返事で快諾せられたのも、思へば忠節の餘光であらう。仍て早速お札位の大きさに揮毫を乞ひ、用助を呼び出し、大將の好意を告げて件の名號を遣はした。その時の彼の顔!、嬉さを眞面目に包んで忝さに捏煉あげたやうな、手数のかゝる表情をなし、『お有難う御座います』と平伏した。大將は

慈愛の籠つた眼で静かに見やり

『貴方には感服したぢや、折角自重して益々忠義を勵みなさい』

『唯』

一問一答に何ともいへぬ至純の人情美が溢れ、座にゐる者何れも頭を低れて仕舞つたよ、さうして恐らく是れが大將の佛名を書かれた最初であらう。

◇

やがて五年の月日は経つて、明治四十四年の春となつた。當時私は學習院の御用掛兼務を仰せ付かつたので、午後は概ね軍令部から、同院の方に往き、院長たる乃木大將の相談相手となつてゐた。ところが同年四月乃木大將は東郷大將と共に、依仁親王、同妃兩殿下に隨行して英國皇帝の戴冠式に列し、八月下旬歸朝されたのであつた。すると、それから半月程経つての或日の事である。私は平素のやうに軍令部に出勤するため、早朝邸を出

て、俥で十町程行くと、同じく俥で此方へやつて來らるゝ乃木大將にバツタリ出會つた。双方俥を停めて先づ私から訊ねた。

『這麼に早く何方へお出でになりますか』

『貴方のお宅へゆくのだよ』

『では此處で御用を承はりませう』

『何、君に今別段急用があると云ふ譯では無いのだから、不在でも構はん、ちよつとお宅までゆくのだよ』

『さうですか、それではこれでお別れして、午後目白(學習院所在地)でお目に掛りませう』

◇

大將の氣性を知つてゐる私は強ひて止めはせず、其の儘別れて出勤し、午後約束通り目

白の幹事室で院長に會うた(乃木院長は概ね幹事室に居られた)。さうして其の日の要件を片づけて仕舞つてから、一緒に麥湯を呑みながら雑話に移つた。すると院長は妙にくすぐつたいやうな顔をして、

『小笠原君、今日は君の宅へ始めていつていや酷い目にあつたよ』

『どうしてですか』

『實はね、これを(側の紙包を指された)英國から持つて來たので、進呈しよう思つて、それで今朝伺つたぢや、立關て案内を乞ふと、顔の平たい老人が現れて役所——大方執事の事だらう——は未だ來んと云ふ意味を、甚い九州辯で云ひよる、いや君で可い、御主人が御歸宅になつたなら、これを差上げてくれ、と此の包を出すと、老人更に受取らん。主人が不在中は誰からでも何でも受取つてはならぬと申し付かつてをるからと、難解の言葉で吃々と斷りよる、いや俺は乃木ぢや、御主人とは御懇意で今もつい

其處でお目にかゝつて來たのぢやから、決して心配はいらん受取つてくれ、といふとね、じつと自分を見てゐるが、いかにも恐縮した容子で、乃木様で御座いますか。わざ／＼お出になつて誠にお氣の毒で相濟みませんが、主人の申し付けには反く譯には參らん、いや取つてくれ、取らぬ、三十分も押問答をやつたが、迎も駄目ぢや、仕舞には泣き出しさうな顔になつて、それならかうしてくれ、主人が歸つて來て頂戴しても可いと言つたら、夜中でも何でも何處まで、も伺つてお預かりして主人に渡し、決して徒足にはさせんと云ふのぢや、理窟が立つちよるので、如何とも仕方がない、すご／＼と再び其の包を持つて車に乗つたがね。餘り器量はよくなかつたよ、車夫の奴め笑ひよつた。近來彼の位の頑物に出遇つた事がないよ、實に散々な體さ』

◇

滑稽味を裏面に藏してをられる院長は、餘り散々でもないらしい、否寧ろ會心に近い笑

を浮かべて、頭をくるく／＼撫てまはした上、無邪氣に二三度打振られた。

『痛快に頑固な彼れは定めし御舊領の者ぢやらうが、藩中かね。それとも村ですか』
何だか、甚く閣下の氣に入つたやうである。私は眞眞の彼れの事であるから、得意になつて、うんと馬力をかけ、十五の年齢から六十餘年間三代に仕へて忠誠一日の如く、親類一門中の褒者である事を麥湯を呑み／＼、一時間に互つてまくし立てた。最初はさも愉快げに聽いて居られた院長は、説話の進むにつれ、多血多感の心泉は節義の風に煽られて頓に共鳴の波を擧げ、瞑目一番熱涙は臉を破つて滴々と下つた。

『天晴硬骨漢、小笠原家の寶ぢや。よう可愛がつておやりなさい。今後はもう滅多にさういふ人物は出まい。話を聞くだけで胸がすつとするね。人間の活手本、乃木が敬意を表すると傳へて下さい』

言ひ了つて感慨之を久しうしてゐられた。



爾後院長は、折に觸れては用助氏は元氣かねと尋ねられる。決して呼び捨てにされない。さうして或時などは、私が歸りかけてゐるのをわざ／＼呼び止め、白金巾に包んだ物をもつて馳けだしてこられ、これは今日宮中で頂戴して來た菓子だから、用助氏に遣つて下さいと手渡しせられた。又だん／＼親しくなり、夫人が來訪せらるゝやうになつてからは、奈須野の別墅で出來た野菜を贈られた事もあつた。忠實の徳といふは恐ろしいものでは無いか。

世界的二偉人と忠僕との關係談はこの位にしておいて、いよく本項の主眼たる彼れの觀世音信仰と、不思議の因縁とに轉じよう。

宿縁とでも云ふのであらう、彼れは生れながらにして觀世音が大好きであつた。さうして物心つく頃から、居村の片ほとりにあるさゝやかな觀音堂に參詣し、水や野の花を手向

けては一心不亂に拜んでゐた。すると十六七になつた頃の或夕べ、奉公の暇を見て、例の如く夢中になつて拜んでると、本尊の方から、何かもやくしたものが迸つて自分の胸に這入つたやうな気がしたさうだ。すると其後何時となしに

觀世音、南無佛、與佛有因、與佛有緣、佛法僧緣、常樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念念從心起、念念不離心

と云ふ所謂十句觀音經を覺えて仕舞つたと、正直な彼れは堅く信じてゐる。

或ひはこれは嘗てどこかでこの經を聞いた事があつて、それが潜在意識となつてゐたのかも知れない。その解釋は別問題として、彼れの觀音信仰は益々熱烈になつて、終には他人の患部を押へて讀經すると、苦痛が治る程の靈驗を示すに至つた。是れも科學的に申さば精神療法といふものなんだらう。兎に角幾千人といふ人數が、治つた恩報に觀音信者に

なり、南無觀世音と唱へるのだから、駈けだしの坊さんなどの遠く及ばない所である。

それでゐて彼れは一錢の謝禮をも受けない。さうしてその言種が面白い。

『俺はうちの隊長が食はしてくるから何も入らないよ。それよりも觀世音にお禮をいひなさい、南無觀世音』

とやる故、相手はその無慾だけでも、感激せざるを得ない。彼れを見ること名僧知識の如く、終に禮拜する者さへ現れ、『用助大先生』、『用助大人』、甚だしいのは、『用助御坊』と來たから振つてゐたね。

明治二十六年も歳暮に迫つた或日の事、彼れは執事の命令で、何か取出しに土藏へ這入つた。暫時すると命令かつた用も何も打捨て、三寸程の小厨子を目八分に捧げ、仔細らしく首を据ゑ、眼を見張つて、ツカ／＼母の居間へ這入つて來た。斷つておくが、亡父が存

命の頃より、彼れに限り家内どこへでも、勝手に出入し得るの特権を與へてゐた。されば今も彼れはこの特権によつたので、いきなり這入ると床の間に件の小厨子を安置し、それから母に向つて、次の顛末を物語つた。それに據ると、毎年蟲干の節鎧櫃のすべてを掃除してゐるたにも拘らず、誰も氣付かなかつたのか、今偶然一個の鎧櫃中から、この小厨子を發見した。扉を開くと中には千手觀世音の尊像が在す。これは必然隊長（私を指すのである）を守護するために、御先祖様がお出しになつたに相違ないから、爾來隊長が之を奉持する様勧めてくれと、母に懇願するのであつた。母も勿論之に同意して切に勧めた。私は當時別段信仰も有つてゐなかつたが、母も安心する事だし、用助の深切も無にしたく無い。それに小さいもので、大して邪魔にもならないから、母の勸告通り、乗艦高千穂に持ち歸つて、自分の私室の棚に安置し、裝飾半分に造り花などをその前に具へてゐた。



その中歳が改まると、彌生の初からは、この漫談の最初に出した布哇行きとなり、續いて七月からは日清戦役が勃發し、九月十七日には、有名な黄海大海戦が起つた。高千穂はこの際遊撃隊の二番艦となり、吉野、秋津洲、浪速の僚艦と共に先鋒を承はり、本隊と相呼應して五時間に亘る奮戦を續け、敵艦五艘を撃沈し、その他にも大損害を與へ、修理を加へずして巡航し得るもの一艘も無きに至らしめ「威力すでに敵海を制壓するを覺ゆ」との勅語を賜はつた程の大捷を奏したのである。

私は當時最後の七等大尉（現今の中尉相當）で、受持の兵器といへば、檣樓のガットリング機砲ばかり、その他は死傷者を運搬したり火災を消止めたりする、餘り氣の利いた役ではなかつた。併し勿論神妙に勤めてゐると、戦闘酣になつた頃、「火災だ」「火災だ」と疾呼する聲が下甲板で聞えた。

そりや來たと防火隊を引率して飛び込んで見ると、敵艦定遠か鎮遠かより放つたと覺し

い巨弾が、鐵板に三箇所も大孔を穿つて、私の私室内に爆裂し、あらゆる物を微塵に碎き、戸を吹き飛ばして室外にゐた兵士二人を斃し、一人を傷つけるなど、狂暴の限をつくし、さうして私の衣服寝具等を燃して、黄褐色の煙はその邊に渦巻いてゐた。「ポンプ用意」、防火隊の活躍は始まり、數分間を出でずして全く消止め、死傷者の運搬も済んだ。戦闘終り、私は自分の室に這入つて見て、あまりの亂雑さにきもをつぶした。たゞ一枚の外套にさへ十三箇の小弾痕が印されてゐた程で、碎けなければ焼け破れ、殆ど完全なものが無の中に、偶見ると棚上に安置した観音の厨子のみは、開いてあつた扉が閉ぢたのみで、依然として元のまゝである。それだけでも私はすでに或靈驗を感じたやうな氣がしたが、扉を開け尊像を拜するに及び、思はずあつと叫んで、自づと合掌して仕舞つた。といふのは尊像の右方の御手が二三碎け落ちてゐたからである。

話頭は九月初旬に戻り、一夜私は大海戦の夢を見た。敵は横陣に構へ、我れは縦陣で、その前面に進行し、遂に激戦を交へてゐる中、敵弾のため右腕を打たれたと見て夢は醒めた。私は便の序に夢の有様を母に申し送り、負傷の事だけは省いておいた。すると十七日に大海戦が實現し、さうしてどうだらう、海戦當初の彼我の陣形は、殆ど夢に見た通りであつて、加之私の室が打たれ、觀世音の右方の御手が落ちてゐるは無いか。さなきだに神経が興奮しきつてゐる激戦の後であるし、自分の所持品は何から何まで、無残に打ち碎かれるか半焦げかになつて、足の踏み入れ所も無い程亂されてゐる光景の中に、傷つきながら、赫として立たせ給ふ尊像を拜しては、いかな無信心な私でも、菩薩の慈悲を感受せずにはゐられなかつた。さうして之を迷信と笑はれても差支ない、之を偶合といはれても構はない、私は單にあつた事をありのまゝに述べるので、その解釋の如きはどうかあらうとも私の關する所て無い。

戦役後も、私は常にこの尊像を身邊から離さなかつた。であるから、その後私のゆく所へは尊像も必ずゆかれた。即ち英國をはじめ歐洲諸國、エジプト、アデン、セイロン、シヤムなどや、日露戦役に關しても、夫々諸方面をめぐつて冥々裡に功德を植ゑつけられたので、なか／＼三國傳來どころの驕ぎではない。その中でも特に述べたいのはシヤム訪問の時である。

シヤムの都バンコックにワッサケといふ寺院がある。この寺には佛骨があつて同國第一の靈場とせられ、先年我國佛教の各宗派から委員が出て、大谷光演師が委員長となつて同國に渡航し、奉持して歸つた佛骨(今名護屋の日暹寺に安置せられてゐる)といふのは即ちその一部ださうだ。

私は明治三十五年軍艦淺間の乗組となつて、渡英の歸途シヤムに寄港し、十一月三日大

澤中佐(現少將)外數名と共に、ワッサケ寺院に有名な大知識タンマ・ターナー・チェリヤ大僧正を訪問したが、この際も例の尊像をポケットに入れていつた。

一體シヤムでは佛教僧侶の權威は偉いもので、大僧正といふやうな高僧になると、國王の方から禮をする程であるから、大概は王族を以てこれに充てるの例になつてをるさうだが、このタンマ師は平民の出であるにも拘らず、徳學兼備の譽れが高いため、破格を以てこの高位を授けられ、國王はこれに對して師事せられて居るとの事だ。彼れは素肌に黄色の法衣——といつても大風呂敷のやうなもの一枚を纏ひ、その一端を左肩から右脇に掛けて斜に結び、右肩をあらはにし、跣足である。彼れはわが軍艦入港と聞いて悦ぶこと限りなく、翹首して我々の訪問を待つてゐたさうだ。であるから、直ぐに迎へ入れて欸待至らざるなく、丁度同寺に留學してゐた智恩院の派遣僧 概 旭乘といふ人の通譯で、色々の

談話をはじめたが、出家に似合はず東洋の大勢に通じ、新式小銃採用に關する建白までやつた程、進歩した頭腦の持主である。さればわれ々を捕へて、或は政治を論じ、宗教を説き、談論風發、意氣凜然たるものがあつた。

◇
そこでこつちも負けん氣になつて

『識者中動もすると、佛教は現世の無常のみを説く消極的のもので、印度の滅亡が何よりの證據だといふが、それが大間違ひである。無常を説くのは眞の常住を示す前提であるし、印度の亡びたのは佛教を捨てたからだとも觀れば觀らるゝ。反つてこの方に立派な證據があるので、例へば佛法護衛の大檀那といはれた阿育王の治世はどうであつたか。佛教四方に布かれて道義隆んに、つひには全印度を統一して、威德遠近に輝いたではないか。これに反して滅亡前後の思想界を觀るがいゝ。佛教は新興の印度

教のために驅逐せられて殆ど影をひそめ、大聖釋尊が出世の眞旨は、わが大日本國に培はれ、こゝにその本領が發揮せられて、國民中佛教信徒が最多なるに拘らず、國威隆々として旭日昇天の勢ひを示し、今や世界の最強國たる英國と同盟して、東洋の平和をはかるに至つたは、佛教のために人意を強うするではないか。これに鑑みても、貴國は一層奮起して前途の光明を望み、佛法のため、人道のため益々健闘せられんことを希ふ』

◇
と無性にまくし立てた。

タンマ師は終始にこゝとして、慈父が理窟をこねるヤンチャ息子を眺めるやうな、温かい眼光で私を見つめてゐるが、『偉い偉い』といひたげに私の肩をたつき、やがて親しく前に立つて寺内各所を案内してくれた。先づ螺旋狀をなしてゐる石段を登ると、上は有名

な佛骨奉安の聖堂になつてゐて、端嚴莊麗を極め、何となく靈氣堂内に漲つてゐるやうな心地がした。私はポケットに收めて來た觀音の尊像を取出し、冠形の靈龕に對して恭しく捧げ持ち、これと共に禮拜すると、それを不思議さうに見てゐたタンマ師は、何んてあるかと尊像の理由をたづねたので、これは大乘釋尊の慈悲力の代表だと答へて、私が被つた靈驗の主要を説明し、拜んで下さらないかと頼んで見た。すると師は、快く承知して、敬虔な態度で禮拜してくれたのは、神聖な場所と、碩徳の國師と、相俟つて尊像の由來記に更に光輝を添へたものである。歸朝後、この顛末を話した所、用助は殆ど感に堪へ、フーンと小鼻を怒らせたぎり、言葉も出でず、誰にするともなくお辭儀をして仕舞つた、どこまでも可愛い老爺さ。

◇

大正五年七月十九日、用助は八十二歳で眠るが如くに逝いた。その臨終間際の報知に、

私は觀音の尊像を持つて駈けつけると、彼れは信者の一老婆に背後から抱かれながら、大勢に取まかれ、やゝ呼吸苦しげにハハハとしてゐたが、私が、耳の側で、これを拜みなさいといふと、靜かに眼を開いて尊像を見るが否や、顔は頓に法悦に輝き、合掌して唇を動かしたつ、生より死に遷る區別も無いやうに、安焉として逝き、その顔にはなほ感喜が漂ひ、漫に高僧の示寂をしのばせる立派さであつた。彼れは妻に先だ、れ、兒は無かつたので、私が施主となつて菩提寺妙祐山幸龍寺に葬り、その墓石には、彼れが一生一度の願望であつた私の定紋を刻んでやつた。今年今月は丁度彼れの十三回忌に當つてゐる。さうして彼れが発見した觀世音を、大觀音建立會に奉納したのも、或は彼れの導きてはあるまいか。徹見し來ると、用助即觀音で三十三身中の第十七優婆塞身といふのであらう。嗚呼妙智の力!

二大俠と私

五郎兵衛生と云うたら、一人の長い名前と思ふかも知れないね。近來は一種の好奇心からか、恐ろしい長い名前をつける人がある。餘談に渉るが、餘り奇抜な一例であるから擧げて見よう。大正十四年十月六日の某新聞に

福岡縣の耳納山の山麓に、「中野東郷平八郎」といふ若者がゐます。中野が姓で東郷平八郎が名です。父親が、東郷大將を神様の如く敬つてゐるところから、ツイこんな名をつけてしまつたので、役場の戸籍係が「別段悪いといふわけではないが、せめて東郷だけはとつて、たゞ平八郎としたらどうだ」と懇々としたが、本人はどうしても承知しなかつたさうです。

崇拜熱も斯うまで昇ると、少々恐怖するね。

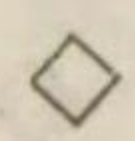
所で前述の五郎兵衛生は、決して一人の名前ではないのであつて、先づ試みに之を三分し、弊家の通名なる長の字を各々の頭に冠らせて見給へ。

長五郎(清水次郎長の本名)と、長兵衛(幡隨院の親分)と、長生(談者の名)とに分れるだらう。何んだか下手な判じ物の様だが、以上二人の大俠と私との間には、妙な因縁が纏つてゐるのだよ。



先日(七月二十二日)は次郎長の菩提寺駿河國清水市の梅蔭寺で、その銅像除幕式が擧行せられ、頭山満翁、長谷川久一知事をはじめ、朝野の名士や縁故者等が千餘名も参列したさうな。私も是非にと、銅像建設の主唱者たる『精神滿腹會』の理事長長平野光雄氏から招待されてゐるが、少し加減が悪かつたため、残念ながら愚息を代理に派し、祝辭を代讀させ

たのである。次郎長と私との關係については、可なり世間に知られてゐるし、『次郎長晩年の面影』(細熊手所載)『私の見た清水次郎長』(鐵櫻隨筆所載)その他二三の雜誌には逸事を掲載した事があるので、こゝでは一切それを省略き、唯今回の銅像建設に關聯して起つた事を、少々述べさせてもらはう。

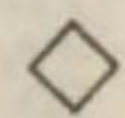


先づ第一には『精神滿腹』の額の事である。私は嘗て『次郎長晩年の面影』中に其の直話と批評を斯う記して置いた。

『俺は山岡さんから度胸免狀を貰つてゐる。劍術の免狀を貰つた奴は多からうが、度胸免狀は俺一人だ。』

氣焔萬丈當るべからざる其の度胸免狀なるものは、彼れの部屋に掲げられた大額で、それには山岡鐵舟居士が雄勁の筆を揮つた「精神滿腹」の四字が書かれてある。彼れ

は單純に之を度胸免狀と稱してゐる。鐵舟居士も或ひは、是はお前の度胸免狀だ位の事は言はれたかも知れん。併し居士が此の語を選ばれた眞意は、決して然麼淺薄な理由のみではあるまいと思ふ。「精神滿腹」の語の中には、勿論度胸や膽力の如きものも含まれてゐるには相違ないが、同時に、義に勇むとか、難を避けずとか、身を殺して仁を爲すとか、正を踏むとか、威武に屈せずとか、廉直とか、誠實とかいふやうな、一層高尚な道德的意味合が寧ろ主であつて、次郎長の人格讚美、生涯の批判でがなあらう。そは兎も角も、その一語に彼れが爲人は盡されてゐる。嗚呼精神滿腹!』



すると昨年の春であつたか、次郎長私淑の本家で當時代議士であつた平野光雄氏が、銅像建設につき私が有つてゐる寫眞を借りに來られた節、例の精神滿腹の額に言及し、私の話によつて夫が山本家(次郎長の姓)に取つて唯一無二の寶物である事を知り、一時行方が

山本家
次郎長私淑
銅像建設

不明になつてゐたのも、所在が判つて、今では同家の什寶となり、且それに因んで、精神満腹會なるものを起し、海軍大將八代六郎男を會長に推したから賛成してくれとのことであつた。私は無論賛成し、八代大將の會長を最も意義あるものと解した。といふのは、大將に兄事してゐた故廣瀬中佐は、次郎長と深交があり、すでに私が同氏を訪問ねたのも、その紹介に因つたのである。加之次郎長は俠客中の大將、八代男は大將中の俠客、互に表裏をなして日本魂を發揮してゐるのだから、觀やうによつては、兩人は二にして一なので、これ程適當な會長は、恐らく他には無いであらう。

唯遺憾至極なのは、大將が折悪しく病んでゐて、先日の除幕式に缺席せられた一事で、如何に本意なく思はれたか、察するに餘りあるが、これも浮世の常で已を得ない。唯一日も速に回復せられんことを懇禱する。併し幸ひな事には、大將と肝膽相照し、更に次郎

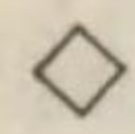
長に共鳴を有たる、頭山満といふ昭和の大雄俠が、巨軀を運んでドッシリと式場の主座に就かれたので、千餘の健兒は、どんなに満足したであらう。初對面の愚息までも『偉大な方ですね』と、すつかり感服して、さもなく愉快さうに見え、歸宅後もハシャイで容易に眠らなかつた位である。又同じく出席した長谷川知事の親父といふのは、私の舊藩士で、杉浦重剛氏とは斷金の友であつた工學博士長谷川芳之助といふ豪傑である。彼れは維新後杉浦氏と同様、藩の貢進生に選ばれた程の秀才たるのみならず、慷慨憂國の士で、露國との開戦前、對露同志會を組織し、七博士の牛耳を執つて當局を鞭撻した事は有名の話で、これ亦偉大の學俠であつた。今の久一知事も、乃父の血を受繼いでゐる俠骨兒なれば、數多い知事の中に、次郎長の除幕式に列するには、最も相應い一人であらう。

斯う數へ來ると本當に不思議だ。これが諺に云ふ『眼の寄る所に球』なのであらうよ。

あれも俠、これも俠、俠にかぶれて弱蟲の私まで、臆面もなく銅像前の石柱に漢文で、『親く仰ぐ大俠の雄姿、遙に望む芙蓉の秀嶺』とやつたものさ。さうして愚息に代讀させた祝辭と云ふのはかうだ。

精神滿腹に基調し、義俠を以て一貫した次郎長親分は、眞に男の中の男である。されば縦ひ銅像たりとも、其雄大の姿を仰ぐことは、輕薄無節操の世相に取りて何よりの實物教育となるであらう。抑も大日本國の生命は日本魂に存し、然して之を通俗的に體現したのが次郎長親分の本領である。後進者が此の點を承了してその精神を傳へ得たならば、親分も何程満足するであらう、以上を祝辭とする。

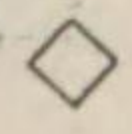
文は拙いが次郎長の精神は斯うであつた、確く信じてゐるのである。



次ぎに銅像の姿勢に就いては、著手前に色々の意見があつたやうで、平野氏やら銅像擔

任者の青年鑄造家吉田三郎氏やらが、私の意見を訊ねに來た。聞いて見ると、威勢のい、連中はどうしても華やかなのを望んだやうだ。

三尺無反の大業物を落挿に、兩手を懐の寛濶出立ち、秋野の薄と穗波つくる白刃の眞正中を、男兒の膽魂は斯うだと許り、大外見切つた所に限る。と、恐らく芝居が、りのもあつたさうだが、私はあまり賛成しなかつた。其の理由は次郎長が發心後——と云うたら叱られるかも知れないが——の大眼目は、清水港を盛にするにあつたので、それが爲めに汽船會社を起すことを主張して成功したり、私費で英語の教師を聘したり、三保を開墾したり、住民に商業道德を説いたり、實に全力を之に傾注したと云つてもいいのである。

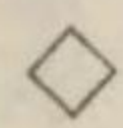


彼れは毎に斯う主張した。

『静岡は東海道の要地で、清水は静岡第一の良港だ。若し清水が盛になれば、縣下一

般がその潤ひを受けることになるし、静岡の發展は延いて東海道の發展となるのだから、俺は、一生懸命になつて清水を盛にせにやアならぬ。さうすればきつとお上への御奉公になる』

議論は單純で、經濟學から觀たならどんなものだから判らないが、善いと思つたら直ぐに實行するのが偉いでは無いか。殊にその結論はどうだ』お上への御奉公になる』これが結論であると同時に出發點でもあるのだ。さうして彼は或點まで、その目的を達してゐるのだから、須くそれに據るべしだと力説した。勿論私の説ばかりでも無かつたらうが、兎に角彼の習慣である手拭を持ち草履を穿いて、昔時ゆかしい石垣に腰をかけつゝ、嬉げに清水港を眺めてゐる姿勢が出来上つたのである。二世次郎長君！奮發してこの銅像の側に、も一つ建てられるやうになり給へ。



次郎長の記念文字を書いたのと前後して、『幡隨院長兵衛誕生地』と云ふ大文字の揮毫を頼まれたから妙では無いか。この碑の石材は、長さ二丈、幅四尺五寸、厚さ三尺といふど、かい自然石で、もう近々出来上がるであらう。長兵衛の碑とくると、どうしてもお江戸の真中、東の春に咲誇る花川戸あたりで無いと納まらぬやうだが、飛びも飛んだり江戸を距ること三百餘里、肥前國は松浦の郡唐津在相知村字久保といつたら、町奴黨は定めしむてい癩に障らうが、事實はどうも仕方がないよ。否暫く待つてくれ、國自慢では無いが、唐津は存外の仙境で、或る意味からは、長兵衛親分の故郷として相應い所かも知れない。昔は元軍を呑み、近くは露艦を覆したる玄海灘の潮風を眞額に浴び、筋金入だと叩けば音する鐵腕に船柄を握つて、波間に跳る勇魚を追ふ若者あれば、夕月の影淡い領巾振山を仰いで、石に化りしと唄はる、迄に堅い操に身を捧げた手弱女の昔踊りをしのび、詩情に浸る風流男もをる。

さうかと思ふと、豪氣宇宙を吞吐し、六十餘洲を平定して餘力漏らすに所なく、終に軍を鷄林に進め、明天竺をも征服しようとした豊大閻が、本營を置いた名護屋城址も聳えてゐるよ。まだ／＼その外に、それ虹の松原ぢや、やれ松浦川ぢやと、到る所名所古跡で眼を突きさうだ。一口にいふと唐津その土地が、俠氣と優美とを兼備してゐるのだから、その産物に塚本長兵衛があるのは、それ程不思議でも無いだらう。彼れは十四歳の時、父に連れられて郷里を出て、江戸を志して下關までやつてくると、父は急病で倒れて仕舞つた。仕方がないから長兵衛は、たゞ一人辿り辿りて江戸に著き、終にあゝした大俠客になつたのである。今でもその郷里和知村には塚本姓を名のつてゐる家が二十軒もある。その總代として同姓平市といふ人が、碑文揮毫依頼に東京したのさ。



それなら何故今まで何もせずに投つておいたのかといふと、幕府時代には、なんだ俠客

などになつて一門の面汚だと、憤慨する者はあつても同情者は皆無であつたさうな。當時に於ける地方人の純朴さが見えて面白いではないか。

私共はどうも長兵衛と聞くと、直ぐに顔の長い目の大きな九代目團十郎を聯想するね。

鈴ヶ森でも湯殿でもチャキ／＼の江戸ッ兒で垢拔の上に磨のか、つた哥兒でないと、承知が出来ないやうな氣がするよ。先般も婦人客の一團に記念碑の話をした序に、

『お若いの、お待ちなせえ、と來るからヤンヤ／＼だが、あれを唐津訛でやつたら可笑なもんだらう。』

「若か人、待たんけえ」はどうです』

と笑つたら、中には憤然となつて、

『長兵衛が、そんなこといふもんですか』

と大に抗議を申しこんだから、

『それでも彼は十四歳で江戸へ出て卅六歳で水野十郎左衛門に殺されたのだから、一生の三分の一以上は唐津ッ兒だつたのです。訛はその人の國手形とさへ言はれる程脱げにくいものなので、貴嬢が何と辯護なさつても「待たんけえ」ですよ』
あまりむきになるのが可笑いので、いよ／＼からかふと、相手もますます頑冥に抗辯し、今もつて承服せず、吉右衛門即長兵衛と決めてゐるよ。

◇

まア其麼冗談は措くとして、長兵衛無かりせば、江戸町人は、什麼に悪旗本に惱まされたか知れないよ。長兵衛がわざ／＼殺されに、水野方へ往つたのは、決して白柄組と町奴との衝突を憂へたからでは無い。衝突は最初から分つてゐるし、或意味からは衝突を促進せしめたとも言ひ得る。彼れが殺されに往つた本旨は、斯くして旗下の横暴を幕府に知らせ、因て以て彼等を懲らし町人の難儀を救はうとしたのだ。行方こそ違ふが、佐倉宗五郎

と同じ精神なので、所謂身を殺して仁をなしたのである。さうして夫が實現されたから、彼れ亦安んじて地下に瞑してゐるだらう。

洵に長兵衛と長五郎(即ち次郎長)とは、群を抜いた古今の二大俠客である。すつきりとした長兵衛を、一重の吉野櫻に譬へるなら、どつしりした長五郎は、八重の牡丹櫻と言ひたいね。兩者盛りの時節には前後があるが、雄々しく散らんず覺悟は一ツで、民衆化した武士道なのである。かの娑羅雙樹とやらの花が、夕暮の鐘音にホロ／＼と散り、さなきだに泣き出しさうな顔をしてゐる羅漢共に、それを縁として消極の覺りを得させるやうな哀れつぼいのは、雲泥の相違で、灰身滅智を無性に有難がつてる彼等に些と見せてやりた

いものだ。
縁覺も見よや日本の花ふゞき

雅 號

鐵櫻といふ號かね、これは二十餘年前に東郷大將(まだ元帥の稱號を頂戴しなかつた)が選んでくれたものである。

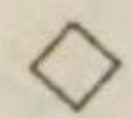
一體私は、青年時代には金波樓主人と號してゐた。その由來には滑稽な話がある。明治二十二年、私が二十三歳の時であつた、海軍少尉になつたばかりで、日進といふ軍艦の乗組を命ぜられ、主に長崎に居り、上陸すると縁屋といふ旅館に宿泊つた。するとそこへ、鎮西日報の記者をしてゐる丹羽といふ人が常に出入してゐたので、何時とはなしに懇意になり、時々海軍に關する新聞種など與へると同時に、出来もせぬ文章の駄ひ螺を吹いて、

丹羽氏を煙に巻いてゐたものだ。それが祟つて一日同氏が改まつてやつて来て

『今日は主筆の命で貴方にお願ひがあつて参りました。何卒お得意の御名文で短篇小説を一つ書いていたゞきたい。すればそれを附録として毎日曜に添へますから、是非

とも御承引下さい』

と來た。



さア弱つた、吹くことに懸けては決して人後に落ちないが、實際はから駄目の上に、まだ小説など一度も書いた事がない。さればとて平素の手前、否口前、今さら出來ないとはどうしても言へた義理でない。エ、ま、よ、何とかなるだらう。と、持つて生れた横着心から

『あアさうですか、承知しました。直きに書きませう』

と、何だこれしきの事、と言はんばかしに、やすくと承諾して仕舞つた。づうくしいものさね、もうかうなつては仕方がない。どうでもかうでも何か書かなくては納まらないので、公務の餘暇、手は著けて見たもの、大苦しみさ、一週間程といふもの碌々寝もしない、夫でも兎に角短篇小説のやうなものが出来上つた。その筋は、孝行な姉弟が誠意をもつて、邪慳な繼母の心を直すといふ、月並の趣向であつた。

◇

が、本人だけは酷く好い氣持になつて得意の顎を撫てまはし、これに『ほと、ぎす』といふ題をつけていよく新聞社に送るまでになつた。そこで三菱造船所に奉職してゐる友人の秀島氏（秀島氏は目下岩崎男の秘書をしてゐる）に頼んで社に持参して貰ふことにした。所がその小説は勿論匿名にしなければならぬので、秀島氏に、君の考案で何とでもい、から假名をつけて送つてくれ、と依頼した。それから三四日経つての日曜日に、有名

な文豪が變名で書いたものを、特別の事情の許に掲載し得るのは、本社の欣快に堪へぬ所である、といふやうな誇張した廣告と共に、『ほと、ぎす』の第一回分が鎮西日報の附録として出版せられた。さうしてその著者の名は須藤金波としてある。妙な名をつけたものが、一體何から考へついたのであらうと、その後秀島氏に會つた時訊ねて見た。すると同氏の答へが振つてる。

『あれか、あれは斯ういふ理由さ。君から假名をつけろといはれたので、色々考へながら出勤して、偶と側を見ると倉庫が眼に著いた。然うして「ストーリー・キーパー」(倉庫番)といふ一語を聯想した。そこで取敢ず之に漢字を當嵌めて須藤金波さ。どうだ、好い名だらう』

◇

私は思はずツと失笑した。何といふ氣拔な思ひ付だらう。善し是に縁んで、自今『金

波樓主人』の號を用るようと定め、それから數年間はこればかり使用してゐた。

◇ この間六年相經ち申し候として舞臺を廻轉する。

日清戰役から續いて臺灣の土匪征伐に従事してゐた我々は、明治二十八年の秋になつて東京に凱旋した。何がさて、戰後で氣は立つてをるし、命拾ひをして來たといふので、青年將校仲間には飲み方が大流行であつた。私も御多分に漏れず、可なり發展したものであつたが、一日五、六の親友と共に、新橋の伊勢勘といふ料亭に登つて、例により牛飲馬食を恣にした。所がたゞばくついて計りゐるのも能の無い話だから、何か面白いものでも聽かうてはないか、といふ緊急動議を出した者がある。すると一座忽ち賛成して、この參謀長には小笠原を任命しようとなつた。よしそれなら俺が引受けたと、平素懇意にしてゐる落語の大家三遊亭圓遊に宛て、直ぐ伊勢勘に來てくれとの手紙を認め、封筒には圓遊

師匠、金波樓主人と書いて使に持たせてやつた。すると間もなく、女中が大きな菓子折を私の前へ持つて來てかういふのだ。

『唯今師匠が遊輔さん(圓遊の弟子)を連れて參りまして、これを差上げてくれといふこととて御座います』

◇ さアわからない。邸へ來る時ならいざ知らず、こんな場合に立派な進物など持つて來ようとはどう考へても變手古である。加之弟子まで連れて來たとは、いよく以て合點がいかない。併し滑稽無類の彼れの事であるから、どんな惡戯を巧んで來てゐるかも知れない。へまをやると、その手にかゝるぞ油斷すなど、一座それ／＼申し合せ、手具すねひいて待つてゐた。

程もなく圓遊師匠悠然と這入つて來た。唯見ると、黒縮緬五ツ紋の羽織に仙臺平の袴を著け、白足袋を穿いた隆とした服装で、手には白扇をぱちつかせてゐる。これに續く遊輔殿もそれ相應の改まつた形で、いと愼ましやかに隨うたのは、頗る眞面目の滑稽を演出し、われ／＼も最初は態とこんな眞似をするのだらう、と思つてゐた。が、どうも腑に落ちない點があるので、可笑さを堪へて眺めてゐると、やつと私の顔を認めた彼れは『おやア』と頓狂な聲を出したが、やがて扇子で額をポンとたいて『やられたッ』と、叫んで態とらしい忿怒の表情をした。

彼れの告白によれば、彼れは金波樓主人といふのを、私だらうなどとは夢にも思はないで、豫々眞眞になつてゐる名古屋で有名な金波樓の主人が、出京したのだらうとてんから極めて仕舞ひ、そこで袴穿きの遊輔召連れの、菓子折持參となつたといふ次第である。

さうして話をかう結んだ。

『だが、落がちやアんとついでるのが嬉しいね。このまんま演れますよ、好い商賣物にありついたと思ふと、まんざら悪い氣持ばかりもしませんね』

列座の面々に瞳められて恐縮した彼れは、てれ隠しに喋々と辯じながら、自慢の大鼻を撫てたり摘まんだりやつてゐた。我々がそれに見惚れてゐるうちに、不思議や私の前にあつた例の菓子折が、何時の間にか消えて無くなつて仕舞つた。妙な働きをする鼻もあつたものだ。但しこの菓子折、決して餘所へ二度の勤務はしなかつたさうだから、念のため断つておく。

◇
これでこの自然の落語も一段落が著いたのである。が、この後日譚とても題したやうな話があるから、序に述べよう。

丁度その頃、讀賣新聞社では、日清海戦を講談風に仕組んで、連載しようといふ企てがあつて、友人の平田骨仙氏を介して私にその材料提供を申し込んで来た。そこで私の名を出されては困るが、材料の提供だけなら承諾しようと思つた。すると三四日経つて、同社の高田早苗博士から、紅葉館の晩餐に招かれたので、骨仙氏と一緒に往つて見ると、高田博士の外に尾崎紅葉山人初め七八人の社員やら寄書家やらが席に列なつてゐた。吉例の舞踊も濟んで宴漸く酣となるに連れ、いづれもメートルが上つて来た中にも、紅葉山人の如きは齒切れの善い江戸辯で、萬丈の氣焔に諧謔を交へ、古今の文士を片端しから熱罵冷評する有様は、今賣出しの花形文士として私が想像してゐた所とは、似ても似つかぬ痛快さであつた。

◇
さアかうなると、私も遠慮しらずの本性どうにも我慢が仕きれず、負けずに饒舌つてゐる

るうち、うっかり例の金波違ひの一件を話して仕舞つた。するとやんや〜の大受で、紅葉山人まで膝を叩いて興がたつたので、大いに面目を施した積りである。所がその翌々日の讀賣新聞の三面に『圓遊の菓子折』といふ標題で、例の一件が頗る輕妙に書かれてゐた。所がその記事中に金波樓といふ粹名(?)が、あまりに誇張的に出てゐた、め、ある方面に物議を醸し、先輩からは叱られる、同僚からは注意される、いや散々な目に遇つたので、有繋の横道者もすつかり參つて仕舞ひ、一時は金波樓といはれると寒氣がする程嫌になつたから、全然之が使用を廢し、長い間書でも文でも本名で押通してゐたが、場合によるとどうも工合の悪い事があるので、ある時座談の席で東郷大將に『私に雅號を選んで下さいませんか』と願つて見た。すると大將は『面倒な事をいふナ』と、笑つてをられたが、四五日すると私と呼ばれて、無造作に『さア』というて、示されたのが巻紙に書かれた、『鐵櫻』の二字であつた。(後になつて改めて色紙にその揮毫を願つて大切に保存してゐる)

固より無言の權化たる大將の事であるから、その出所などについては今日まで一言もいはれない。此方も訊かない。それについて色々な解釋をしてくれるものがあるから世間は深切だよ。餘程以前だが、何かの事で私を訪問した或新聞記者は、その記事中に斯う書いてゐる。

『子爵にはなほ、鐵櫻の別號がある。二腰の大和魂、さすもむべ、吉野の花にたくふ武夫、と詠んだ魚彦の三十一文字から取つたのか。それとも、斯花眞國色異域罕傳聞——敷島の大和心をこの一朵の名花に托し、豫て子が職名に因みて鐵の浮べる城を稱へしか』

と教へはべつてくれたし、他の一雜誌には

『鐵は鐵血や鐵腕の鐵で強硬を象徴し、櫻は一重櫻や八重櫻の櫻で優美の意味なり』

と御尤も至極の解釋が出てゐた。さうかと思ふと、或物識は

『何んでもないよ、鐵は軍艦さ、櫻は海軍の徽章さ』

と安直に片付けるかと思ふと、或粹士の

『潮風に吹かれて色が黒い華族だから鐵櫻さ』

は振つてゐるね。さて私自身にも、さつぱりわからないが、大將がよく藤田東湖の正氣歌を吟ぜらるゝのを聞いたし、又屢々その中の句を揮毫されたのを見てゐるので、これから推すと、或はその中でも有名な

『發しては萬朶の櫻となり、衆芳與に儔しがたし、凝つては百鍊の鐵となり、銳利鑿を斷つべし』

の句に胚胎してゐるのでは無いかと思ふ。勿論これとても、私の臆測に過ぎないので、要するに鐵櫻は鐵櫻で澤山だ。何も出所など詮議だてするには及ばない。

忘れぬ旅行



『貴方は明日役所の都合はどうぢやな、若しお差支が無いなら、一緒に静岡の師範學校を參觀したいのぢや、實は二三日前或る者から、其所では餘程以前より、木劍體操を行つちよると聞いたので、成るべく早う見たいと思つてお誘ひしたのぢや』

明治四十五年二月二日の午後三時頃、學習院長たる乃木將軍は、私を海軍軍令部の一室に訪うて、斯う訊ねられたのである。

私は當時、軍令部參謀として學習院御用掛を兼ねてゐたので、時々同院に往つては、何かと將軍の相談に與つてをつたが、將軍は其の頃頼りに、我國固有の劍道を、體操にても

應用して、初等科の學生に、體育と共に尙武の氣を養成したいと、色々研究工夫してゐられたので、さてこそ静岡出張の議も出たのである。幸ひ私も、差當り急ぎの用事も無かつたので、隨行できる旨を答へると、將軍は満足氣に頷いて、

『ム、それは好都合ぢや、では今晚十一時の汽車で發たう、恐縮ぢやが、一等寢臺を二つ取つて置くやうに、新橋驛に電話をかけて下さらんか』

と、依頼せられた、私は意外に感じたので、

『一等になさいますか』

と、念を押して見た。

『さうです。よろしく御交渉下さい』

言ひ終ると將軍は、さつさと歸られたが、好い按排に寢臺も取れたので、豫定の通り出發した。

是より先き、私が御用掛になつた際、或る友人は私に向つて、

『乃木さんと旅行でもする時は、用心しないと、酷い目に遇はされることがあるさうだ、三等に乗つて十五錢の辨當を喰はされ、加之下手をまごつくと、木賃宿に投り込まれて、虱と同居の憂き目を見ると云ふから、お氣をおつけなさいよ』

と、眞顔になつて注意して呉れた、これがピリツと答へてゐるやさきに『今晚の汽車で』と來たから、さてはと合點して、身構に及んだところ、意外にも『一等寢臺を二ツ』と出られたので、何だか勝手が判らず、つい『一等になさいますか』と、失禮な念を押すに至つたのである。

私は従來も、將軍と旅行を共にした事はあつたので、決して今回が初めてでは無い。が、其の殆ど凡てが、陸海軍の大演習參觀とか、實彈射擊見學とか云ふ場合のみであつたから、

よし友人が注意して呉れたやうな脅辭？ が將軍にあるにせよ、まさかこれを實現する譯にはいかなかつたであらう。併し今回は大に趣を異にして、あまり役目に拘束されない、謂はゞ暢氣な——と云つたら、將軍から叱られるかも知れないが——旅行だから、それには誂へむきだ、まだく少しも油斷は出来ない、と警戒おさく——怠なかつた。

寢臺に横たはるが早い(約十分後)轟々たる車輪の響を壓して、將軍の駟聲は荒まじく起り、脆弱な私の神経などは、散々に惱まされて、うつらうつらするのが關の山であつた。

◇

静岡に著いたのは朝の五時で、四邊はまだ眞暗な上に、小雨さへ降つてゐた。驛の構外に出ると、將軍は私を見返つて、

『何處かで朝食を喰らう、貴方に別段希望が無からにやア、自分が案内しよう』

と、先に立たれた、愈々本領發揮かな、それにしても、今日の雲行は至極平穩で、暴風雨

の襲來は先づありさうも無い、たかゞ今の小雨位のものであらう、と一種の好奇心に驅られながら隨いてゆくと、アツ復意外！ 將軍が『此處がよからう』と、這入られたのは、静岡第一の旅館で、大東京までも鳴り響いてゐるD館では無いか。今は反つて張合抜けがしたと同時に、或は裏の裏ゆく、將軍の嘲弄術に陥つたのかも知れない、との懸念さへ湧いて來た。

世界的に顔の賣れてる將軍が、陸軍大將の軍服着用に及んでゐるのだから、客商賣の達人が見損なふ筈がない、番頭が飛び出す、女將が出迎へる、女中が居並ぶ、それお帽子、それお外套と、手車に乗せんばかりにして通されたのが、二階の立派な室で、火鉢でも、座蒲團でも、特別のものばかりで、何處までも閣下扱であつた。

嗽手水も濟まして、將軍と打寛いて對座した。平素學習院で會ふ時は、概ね會議の席で、侃諤の論のみであるから、今日は殊更之を避け、成るべく罪の無い雑話を交ふるやうにし

たので、將軍も興に入つて、猛烈に發展した昔話なども出て、其の面上には快い笑が漲つて、私も何となく小父さんとても談話してゐるやうな心地になつた。すると將軍は、偶と鴨居を仰いで、其處に掛けてあつた三字額を熟視してをられたが、

『字など滅多に書くと酷い目に遇ふよ。伊藤公や、山縣公が、定宿にしてゐる某地の或る旅館では、山縣公が來ると聞くと、其の書いた額や軸を掛けて置く。が、更に伊藤公が來る時には、忽ち其の揮毫したものと換へて、先のは、物置の隅にでも叩込んで仕舞ふといふ始末さ、叶はんねエ、書いてやつた上に侮辱されては、ハッ、ハッ、ハッ、だから字などは書かんに限るよ』

『いや併しさういふ者ばかりでは無いでせう、眞に閣下なら閣下を敬慕して、御揮毫を乞ふ者には、書いてお遣しになつても善いではありませんか』

『そりや偉い人になつたら、さう云ふ崇拜者も出來るかも知れん。が、自分のやうな

ものは、書かんが一番無事ぢや』

『私はさうは思ひません……』

『まあ待ち給へ、今日はもう議論は止さう。それよりもあの(床間を指さして)梅の軸は能う書いてあるな。文晁派のやうぢや』

梅花！ それは將軍にとつて、優美にして加之其の性格の一面を物語る逸話がある。私は今端なくもそれを憶ひだしたから、少し横道には入るが、其の事柄を述べさして貰はう。



將軍を花に譬へるなら、櫻よりも、牡丹よりも、最も似つかはしいのは梅花であらう。

其の寒苦に堪へて清香を發する所など、どう觀ても乃木式である。それかあらぬか將軍は、壯年時代より殊に梅花を愛し、其の季節には、能く馬を飛して向島の百花園を訪ひ、園梅甲を披き春を迎へて笑ふ、の詩句を思ふ存分に味はれたさうな。適々明治二十六年の、春

まだ淺き頃、一夜頻りに同園の門を叩く者があつた。嵯峨野の秋にもあらぬものを、訪問は誰とばかり、園主が立出て見ると、それは紛ふ方なき乃木將軍で、馬丁も連れず、軍服姿の片手に乗馬の口とつて佇みをられ、

『佐原君(園主の姓)夜間は誰れにも見せぬ園則を承知しながら、推參して相濟まぬ。

が、職務が多忙なので晝間出られず、と云うて、昨今の風では、梅花も程なく散るぢやらうから、夜を冒して參つたのぢや。園則に觸れるとあるなら、盜賊と看做されても可い、何と思はれても構はんから、是非入園を許されたい』

風流この上も無い強談に、園主は悦ぶまい事か、感涙に咽びつ、將軍を迎へ入れて晚餐を饗し、其の間に、園内所々に篝火を焚き、床机を据ゑて將軍を請じた。颯々たる老幹若むして、青龍の躍るが如き上に、満開の花雲を辭してひらくと散りかゝる紅白の花瓣は、篝に照り映えて一入鮮に、將軍の戎衣に幾點の色彩を施した。何と云ふ雅趣豊かな光景で

あらう。名譽の將軍箒を焚いて梅花を賞す、これ丈聞いても、俗骨が洗滌せらるゝやうでは無いか、洵に詩である、畫である、さうして思ひ出である。



這麼追憶に耽つてゐた私は、猶ほ軸物に見入つてゐる將軍に、當時の感想を訊ねて見た。すると將軍は莞爾として、

『然様さ、勿論快い氣持であつた、併しあゝ云ふことも度々行ると、段々興が薄くなるものだから、一度に留めて置くことだね』

談話は、梅花の清節から精神の修養に移り、學習院の教育方針に及んだ。將軍の面上は、緊張の色が浮んで言葉も自然と改まつてきた。

『學者を造る學校は澤山ある。が、さて人間を造る所は少い。此の解決が學習院存在の根本義で、これを誤つたら、其の存在の意義は全然消滅ぢや。自分は教育のことに

は一向經驗が無い。が、學生を日本人らしい日本人に造りあげたい。とそれのみに全力を注いでゐるので、従つて、教導者にも色々注文があるが、品性を高めることが最も大切に思はれる。例へば受持學生の性質を知悉したいと望むあまり、其裏面の裏面まで密偵しようとして學生等に不安の念を抱かしむるやうなことは、決して教育の道には叶ふまい。或は極端に過ぐるかも知れんが、若し學生が、欺くに道を以て來たとするならば、或る場合には、承知しながら欺されてやつて、さうして彼等に、彼等を飽まで信用してゐる、と云ふ教師の誠實さを示して、自然と慚愧反省するやうに、仕向けることも必要であらう。無人格の智者學者は、人格ある愚者に如かずぢや、縦し如何に勉強しようが、奮勵努力しようが、自己一身の、榮達を目的とする利己主義に基づくならば、自分は決して與することが出來んぢや』

私の頭は自然に下つた……ホイこれはしたり、今日は理窟拔きの筈であつたのに。

やがて鄭重な膳部が運ばれて、五六種の料理が並べられた中に、所柄生干の興津鯛があつた。するとおせつかいにも二人の女中が、銘々箸を持つて將軍の傍に摺り寄り『召し上りにくいませう』と、其の鯛を競ひむしつて、身だけをすゝめるのであつた。私は之を見て、本來なら可笑かるべき筈なのに、どういふものか臉が熱くなつてきた、嗚呼彼女等も亦日本人である！ 何とかして此の忠誠無比の將軍に、一分でも一秒でも長く親む光榮に浴したい、とのしをらしい精神からであらう、と考へたら、無性に感悦して仕舞ひ、恥しながらそつと目を拭つた。

將軍は委細かまはず『やアこれは』と、大鯛をペロリ平げて、汁でも刺身でも、悉く舌鼓の材料とした健啖ぶりに、けしからず女中等を満足させたが『あ、満腹』と箸を置くや、徐に兩手で下腹部を撫でられた。

俣でD館を出て、師範學校に向つたのは午前九時で雨は歇んでゐた、私は車上から、前方にある將軍の後姿を見てゐると、例の脅辭の心配など跡方もなく消失せて、老父にても隨行してゐるやうな懐みを覚え、向風も暖かつた。